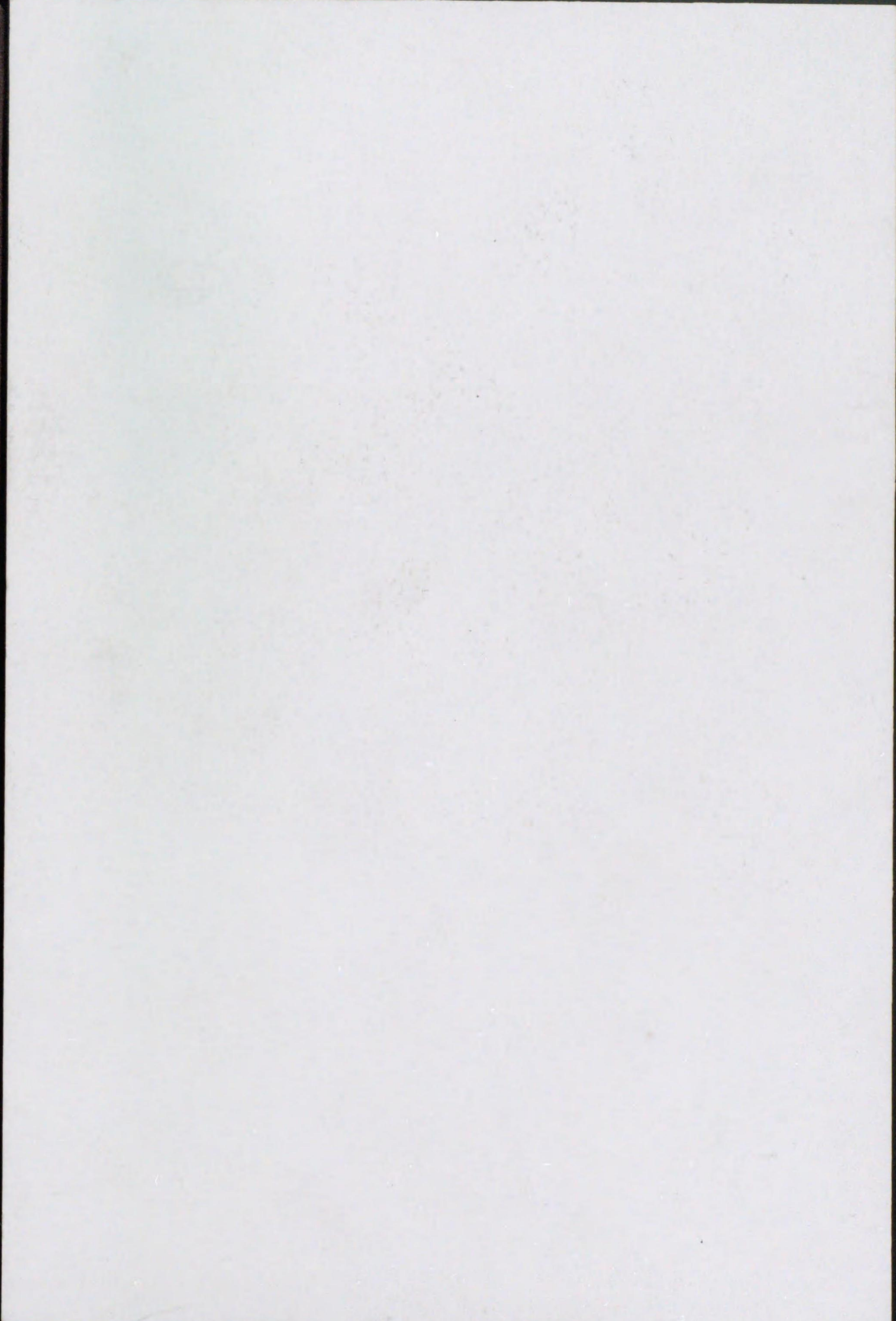


602-1



1200501530514

602  
1





36. 5. 16



242



通樂能と曲謠

野替井横

院書六四







翁 觀 世 左 近

紙 卷 一





男喜田武 (テシ後) 蛛蜘蛛



英重生寶 (テシ後) 老養



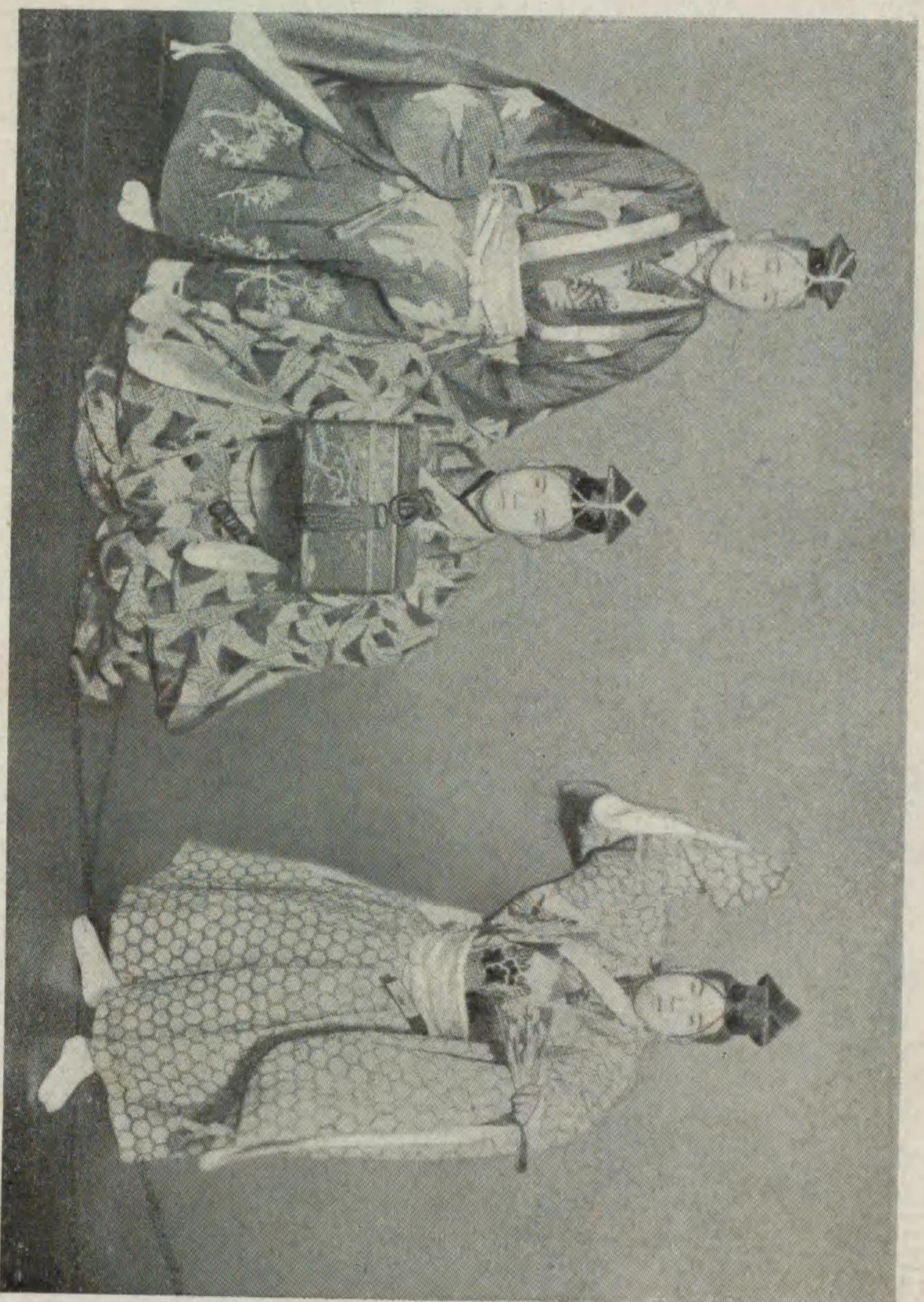


信 島 野 (脇) 刈 布 和

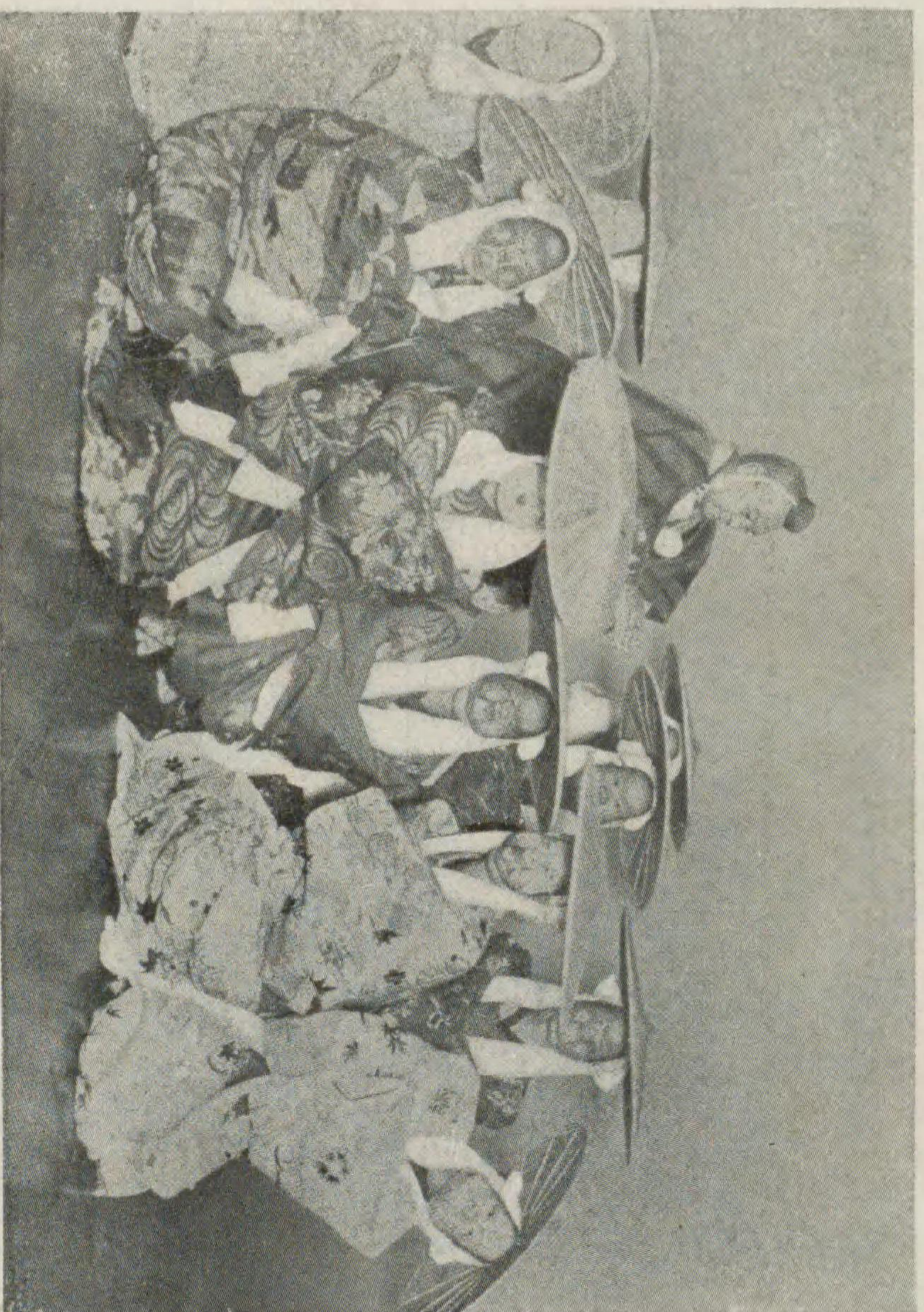


郎 六 若 梅 木 鉢





千 歳 觀 世 織 雄 三 番 叟 多 々 良 外 茂 三 (左)



く さ び ら 山 本 東 次 郎





高野物狂 松本長

### 通叢書發刊の言葉

コルクの上に針で留めて、昆虫を四方八方から観察するやうに、研究が餘りに細目にばかり立ち入ると、時として却つて事實の真相から遠ざかることがあるものだ。

そして又一度に慾ばつて口の中に一ぱい詰め入れた食物の爲めに、聞き取りがたい胴魔聲となるやうに、萬物に對して輕はずみな了解の仕方をすると、兎角自分でも曉わかつてゐないやうなことを話すことがあるものだ。

1 ……緒 言……

本叢書は、各一、微小篇であるとはいへ、いづれも當代に於けるその道の先達によつて、手頃の消化力の下に、それぞれ極めて簡易正確に、秩序整然と研究が進められてあるので、それ等無駄な道草を食ふことなく本叢書を一讀することによつて、人々は直ちに、百般の研究部門に一〇〇パーセントの資格の備つた、一個非凡な「通」人となり得るのである。



趣味の缺乏——難儀な登山をするやうにして生活を背中に負つてゐる現代人に、一番缺乏してゐるのは實にこの趣味の問題だ。  
樂しみの少ない、現代人の退屈な心臓をまぎらはせやうとして、先づこの趣味の通の要諦を約束しようとするのが、本叢書發行の第一の目的である。

#### 四六書院

### 序

能樂は我が古典劇である。謡をうたふ人は多いが、能樂をみる人は割合に少ない。余は明治三十七八年頃より能樂を研究し、能樂の普及、國民化に努力してゐるのであるが、未だ其目的を達することができない。

謡曲をうたふ人は多いが、謡についての一般智識を會得した人々となると極めて少ない。この時に當り、この書を著すことができたことは余の最も満足する所である。最近余は頗る多忙、能樂に關し筆とる暇がない折から、荒井君の熱心に動かされて仕上げたのが本書である。この機會を與へてくれた荒井君に感謝する。

1 ……序通樂能と曲謠……  
元より本書は、初進の人を能及び謡の通にしようとするのが目的であり、しかも紙數に限りがあるので、充分な説明をなすことが出きなかつたことは、遺憾である。さり乍ら、大綱はしるしえたのであるからして、本書を熟讀せらるれば、能通、謡通とならるるに相違ないとは信



602-1

謠曲と能樂通 目次

第一篇 謠

- 一 謠の字義……………一
- 二 應永の猿樂革命とは？……………二
- 三 謠の流儀と各流の特徴……………四
- 四 文學から見た謠……………一〇
- 五 謠の番數……………一六
- 六 謠の古名、異名……………二七
- 七 番謠・小謠・素謠……………三
- 八 地謠……………五

じてゐる。

昭和五年五月中旬

鶴城

横井春野

しるす



九	謡の組織(文章方面よりの解剖)……………	五
十	番組……………	三
十一	習事……………	四
十二	蘭曲……………	七
十三	謡の心得……………	九
十四	謡の修業……………	八
十五	去嫌とかざし……………	九
十六	節博士……………	六
十七	はこびと緩急……………	六
十八	抑揚……………	一〇
十九	位……………	一〇
二十	読み方と文句の軽重……………	一〇

二十一	拍子……………	一六
-----	---------	----

第二篇 能

一	舞臺……………	一四
二	主なる能舞臺……………	一八
三	役者……………	二〇
四	囃子方……………	二〇
五	作物……………	二三
六	小道具……………	二四
七	面……………	二五
八	装束……………	二九
九	囃子……………	三五



十 舞……………一五

十一 替の形……………一六

十二 舞囃子……………一七

第三篇 能狂言

一 狂言の流儀……………一八

二 狂言の番組……………一八

三 狂言の格式……………一九

四 狂言の役割……………一九

五 狂言の装束其他……………一九

六 間狂言……………一九

謠曲と能樂通 目次終

謠曲と能樂通

鶴城 横井春野 著



第一篇 謠

一 謠の字義

1 ……通樂能と曲謠……

は、

「ウタヒはもと歌ふと云ふ動詞を名詞にしたる言葉にて、他の詠歌や小唄などの類に混ぜざらしめんが爲め、ウタと云はずして、特にウタヒと呼び來たりしものと見ゆ。」

謠曲と曲の字を附けるに至つたのは、近年の事である。強ひて曲の字を附ける必要はない。舊幕府の時代には、謠、諷、謳、唄とも書いて、決して曲の字を附けなかつた。大和田建樹氏は、



と説かれたが、ウタヒがウタフと云ふ動詞から出て名詞になつたと云ふ説は大體に於いて首肯される。本邦中古に、聲を出して謠ふものを、ウタヒモノと云ふた。是は、必ず記憶すべきことである。唯詠歌や小唄と區別せんが爲めに、ウタと云はずしてウタヒと云つたとは、牽強の嫌ひがある。

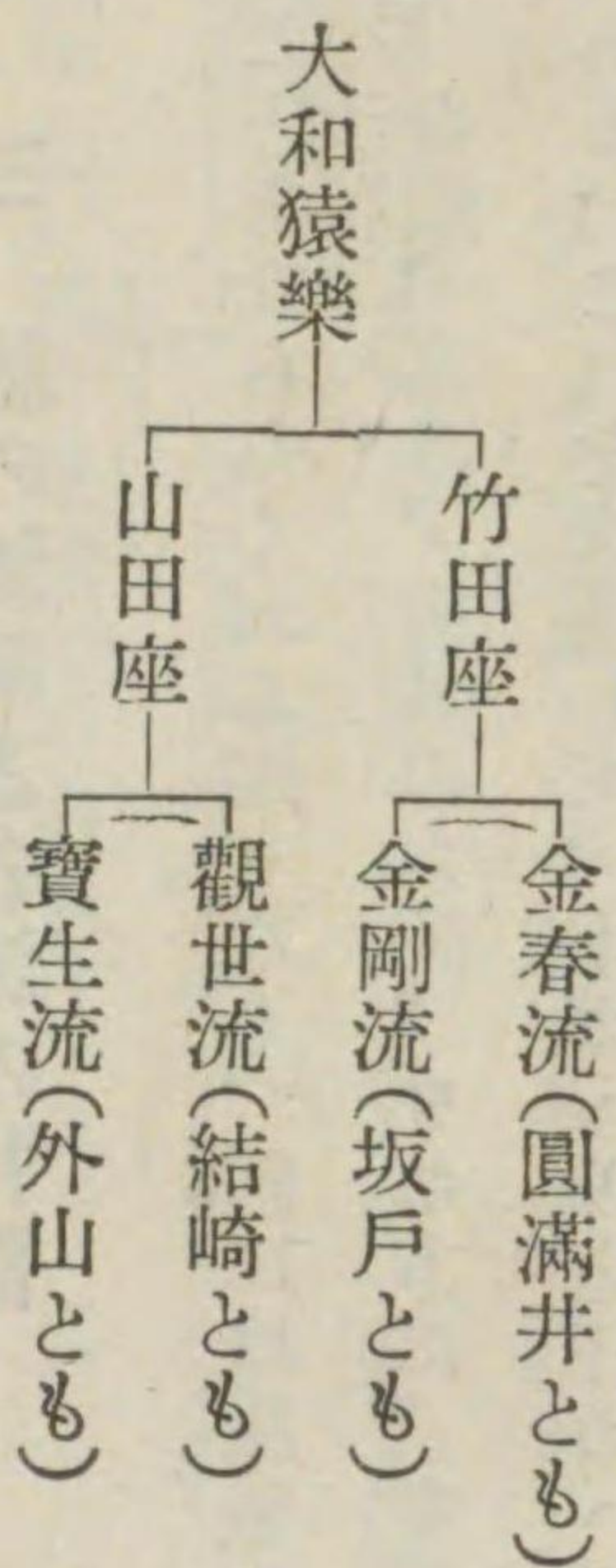
古くは、「謠は浮足の訓にして、浮足とは音聲のことなり……」と云ふ説もあつた。これは牽強の謗りを免れない。

## 二 應永の猿樂革命とは？

足利氏の始め、應永年間に、大和猿樂山田座に、觀阿彌清次、其子世阿彌元清と云ふ天才があらはれた。觀阿彌、世阿彌父子は、足利三代義滿將軍に仕へ、其保護の下に、猿樂の技藝上に一大革命を興へたのである。この革命に依つて生れ出たものが、今日の能のものである。同時に、この時の謠が今日の謠のもとである。應永年間以後、幾多の名人に依つて、洗練に洗練を

加へられたものが、今日の謠である。これらに就いて詳しい歴史的の事實は、拙著能樂全史を参照せられたい。

應永猿樂革命當時に於ける能樂(謠)の流儀は、左表の通りである。



觀阿彌清次こそは、觀世流の初代である。

應永猿樂革命當時に於いては、山田座系、竹田座系共に、謠ひ方には、相違する所がなかつたのである。大和の諸家は、何れも、觀阿の革命謠にしたがつてゐたのであつた。

然るに、年月の経るに隨つて、兩座系の間に謠の相違が出来、次に山田座系の觀世と寶生、竹田座系の金春と金剛との間にも相違が出来てきた。かくして四座獨特の謠ひ方が生ずるに至



つた。この形勢は、足利時代の末に至つて確立した。

かく、四座獨特の謡ひ方を生ずるに至つたとは云へ、觀世と寶生とはもとこれ山田座系である。金春と金剛とは、竹田座系である。其謡ひ方を分析してゆく時そこに、共通のあるものを見出し得るのである。

### 三 謡の流儀と各流の特徴

今更らことあたらしく云ふ迄もなく、謡には流儀と云ふものがある。シテ方には、觀世、金春、寶生、金剛、喜多、梅若の六流。ワキ方に、春藤、高安、福王、下ガ、リ寶生（ワキ寶生トモ）がある。これを大別して、上ガ、リと下ガ、リの二つとする。

觀世、寶生、進藤、福王、梅若は上ガ、リ。他の諸流は、悉く下ガ、リである。上ガ、リ、下ガ、リと云ふ名義に就いては、いろいろの説がある。

（一）觀世、寶生等は、京都に住し、金春以下は奈良に在住してゐたので、京都を上ノ都、奈良を下ノ都と云ふ。その在住地の關係からして、いつとはなく、上ガ、リ、下ガ、リの名が起つたと云ふ説。

（二）上ガ、リは、發音も甲音が多く、節扱ひもすべて上部にかゝりて謡ふ。それに反して、下ガ、リは、聲柄も乙音にして、節扱ひも皆下部にて働く。これは一例であるが、謡ひ風の相違からして、上ガ、リ、下ガ、リの名が起つたと云ふ説。

この兩説何れが、是か非かと云ふことは、強ひて決定する必要はない。

通例我々が、謡の流儀を云ふ場合には、

觀世、寶生、梅若（最近觀世流か）——上ガ、リ  
金春、金剛、喜多——下ガ、リ

の六流を指すのである。

云ふ迄もなく、五流の間には、絶対に優劣はない。例へば、觀世流にも優れた點があると同じく、寶生流にも優れた點があると云つた鹽梅で、決して優劣はないのである。



觀世流の謠は、最も現世的である。或る人の評に、

「觀世流の謠は各方面にゆきとどき、優美纖巧を主とし、節扱ひも圓轉滑腕、甲の聲を多く使ひて、調子も高く、可愛らしく、美はしく、全體にサラリと謠ひて、緩急強く、綺麗に、巧妙に謠ふと云ふが肘腎かと存じ候。

故に下手の謠を聞き候時は、唯口先で喋る様にて、端唄の方へ近より、三味線でも持出し、たくなり、下品に聞え申候。」

と。

元來謠は、世阿彌元清も「謠は小唄がよりなり」と言明してゐるやうに、多く小唄の分子を含んでゐる。小唄とは、足利の始め當時の流行歌で、早歌、又は連歌とも云はれ、樂器は小弓、尺八、カツコ、鼓などを用ひた。けれ共、謠には小唄以外澤山に、中古の音曲の分子が入つてゐる。お寺で謠ふ和讃、鎌倉時代に盛んに武人の間に行はれた宴曲などの謠ひ方も、謠ひの中に入つてゐるのである。云ふ迄もなく、應永當時の觀世の謠は、今程に、優美纖巧ではなかつ

たが、觀世は絶えず樂頭たるの關係からして、この方面へ向つて洗練されたものと思ふ。

梅若は、近年一流を樹立したが、謠ひそのものは、觀世流と云ふもさし支へない。流儀とは稱してゐるものゝ、著しい特徴がない。

寶生流の謠は、質實にして朴訥、觀世の謠を女性的と云へば、これは武士的である。元來山田座の家系の上から云へば、觀世は弟、寶生は兄であつた。けれ共、藝事の上から云へば、寶生は、觀世の分れとも云へる。足利初期に於いては、觀世の謠の間には、相違を認めることは出来なかつたが、足利氏の末頃に至り、金春、金剛等下ガ、リの曲節を漸次加味して、獨特のものとなつたのである。要するに、觀世の謠が土臺となり、夫れに、金春、金剛の謠ひ方が加味調和されたものが、徳川期の寶生流の謠である。然らば、金剛、金春の謠ひ方はどの位含まれてゐるか云ふに、夫れは「どの位」と明言することは出其ない。或る人寶生流の謠を評して、「寶生は調子の高くして麗はしき點は、よく觀世に似寄り候へども、それに強大と申所を



大いに加へ、節扱ひを太く密にし、謠の引立ちて撓まざるを主と致し候。故に下手の謠を聞き候時は、いやにウネ〜ゴツ〜として、小石原でも歩く様な心持が致し候。」

今春の謠は古雅である。金春の謠は、節が少ないからして、面白く曲を謠ふことは出来にくい。流儀としても「ボツと丸く謠ふと云ふ」のが主張であるからして、角々で待ち合はす場所が少ないからして、連吟しても揃ひにくい。古雅素朴の中に云ひしらぬ味ひがあるのである。或る人之を評して曰はく、

「素朴強大を主とし、十分吸ひ込みたる息を以て、座板もゆるがんばかりの勢もて謠ひ出し、節扱ひも最も應揚に丈夫にし、つとめて小細工をさけ、拍子にも拘泥せず、調子も低く、呂を使ふこと多く、武骨壯大を専らと致す様に存じ候。

故に下手の謠を聞き候時は、唯妙にウン〜と云ふ許りにて、優美にもなければ、面白味もなく、昔は金持でも住みし家の、今や大破して、蜘蛛の巣許りと成るを見たるやうな感じが致し候。」

金剛流は、金春の竹田座系であるからして、金春が、つたものであつたが、近年著しく、觀世流に接近した。或る人評して曰はく、

「金剛は形に於いて大いに特質を發揮し、謠に於いては喜多流とほゞ同様に聞きとれ申候。」

喜多流は、後世(徳川期の始め)獨立した流儀であるからして、各流の長所をとつてゐる。これ共、何んと云ふても喜多の謠の根本は、金剛で、夫れに各流の長所が加味されてゐるのである。或る人評して曰はく、

「喜多流は、あとより起りたるだけありて、各流の短所をさけ、音調は其出所をすてず、呂を多く、調子を低くすれ共、金春流程、極端ならず。節扱は圓滿を主とすれども、觀世流程



織巧ならず。ドツシリ丈夫に謠ふことを尊べども、寶生流程節扱を密にせず、各々中庸を得て、圓滿諄清を主とするものかと存じ候。

故に下手の謠をきゝ候時は平々凡々として何の特徴もなく、長く水に浸されたる素麵を食ふが如く、味もなければ齒ごたへもなく候。」

凡そ世の中には、絶對的に善なるものも、又絶對的に惡なるものもない。謠も亦然り。絶對的に優つた流儀も、又絶對的に劣つた流儀もない。されば、五流の間に、差異優劣をつけやうなどゝは思ひも寄らぬことである。各人は、各人の好む流儀を選らんで、専心稽古すべきである。

#### 四 文學から見た謠

足利時代と云ふ文學の畑は、甚だ不作で、特産物が少なかつた。後世に傳ふるに足る文學上

の産物は、謠曲文と狂言文である。源氏物語と枕草子が平安朝文學の特産物であることは、誰れしも知り抜いてゐる事柄だ。夫れと同じく、謠曲文と狂言文とは、足利時代の特産物である。

文學上甚だ不作であつた足利時代にも、徒然草や太平記がみ出されてはゐるが、徒然草は平安朝文學の模倣、太平記は源平盛衰記に厚化粧を施したものであつて、この時代の代表的産物とは云へない。代表的の産物としては、謠曲文と狂言文とをあげなければならぬ。

#### 謠曲文の作者

謠曲文の作者は誰れか。古人は、

「謠曲文の作者は、足利期の僧侶で、作曲者が觀阿以下の能役者である。」

と云ふ説を主張してゐた。この説は、一應尤もであるけれ共、研究を積んでみると、誤りである。世阿彌の遺著十六部の發見以來、「謠曲文の作文者は、足利時代初期の能役者である。」と云ふ説を決定せしめた。



即ち謠曲文の作者は、

「観阿彌を始めとして、猿樂革命時代の能役者である。」

と云ふことに決定したのである。観阿彌清次、世阿彌元清父子は、猿樂革命の主動者として、藝事上の偉人であつた許りでなく、謠曲文の作者であつたのであるからして、此方面からみれば、立派に大文豪の資格があつたのである。余は、嘗て、「世阿彌元清は世界的の文豪である。」との説を公けにしたことがある。猶此點に就いては、拙著能樂全史を参照せられたい。謠曲文作者として著名の人を左に列記して見よう。

観阿彌清次、世阿彌元清、観世小次郎、観世彌次郎、金春善竹(禪竹とも)、金春禪鳳(善鳳とも)、音阿彌、宮増(脇の上手)

が、主なる人々である。此外、能役者以外の人では、三條西殿(内大臣藤原實隆)、細川弘源寺(細川持之)、小日垣能登守、内藤藤左衛門等も作者の一人であつた。大永四年編輯の能本作者謠文によるに、世阿の作は、百五十五番の多きを占めてゐる。

謠曲文脚色の材料

謠曲の作文、作曲に就いては、世阿の能作書、曲附書を是非共一讀することが必要である。謠曲文脚色の材料は、和漢に互り、其範圍は頗る廣いのである。二三の例をあげておく。

(一) 平家物語から材をとつて作られた曲

劔	の	卷	土	蜘蛛	實盛最後のこと	實盛
祇王	の	こと	祇王	佛原	忠度都落のこと	俊成忠度、忠度
蘇武	の	こと	蘇武の旅雁と云ふこと	ひ多く引用されてゐる	青山沙汰のこと	經政、絃上
赦文	の	こと	俊		木曾最後のこと	巴
足摺	の	こと	頼		敦盛最後のこと	敦盛、生田敦盛
橋合戦	の	こと	頼		小宰相のこと	通盛
宮の御最後	の	こと	鶴		海道くだりのこと	千手、熊野、蟬丸
咸陽宮	の	こと	咸陽		千手の前のこと	千手
小督	の	こと	小督			



藤 戸藤 戸  
 大阪越のこと―八 島 攝 待  
 嗣信最後ののこと―八 島 攝 待  
 弓ながしのこと―八 島 景 清  
 遠 矢 の こと―八 島 景 清  
 先帝御入水のこと―碓 潛、大原御幸  
 (二) 袖中抄から材をとつて作つた曲

士佐坊きられのこと―正 尊  
 判官都落のこと―舟辨慶、吉野靜  
 小原への入御のこと  
 小原の御幸―大 原 御 幸  
 六道の沙汰のこと  
 女院御往生のこと

(三) 湖海新聞から材をとつて作つた曲

芭蕉

以上は、一例であるが、これに依つて、謡曲の材料が各方面からとられてゐることが分ればよいのである。

謡曲文の特色

謡曲文の特色は、「古文を巧みに、補綴切貼した」點にある。この特色は一面に於いて、融合統一に缺くる所があると云ふ缺點を有してゐる。けれ共、謡曲は、讀んで味ふべきものではなく、謡つて始めて味ひの出るものである。謡曲文の中では、道行とクセが、出色である。特に道行文の妙味は、他にそれに比すべきものがない。

謡曲文に對して狂言文は、統一のとれた對話文である。

能と謠の影響

能と謠が、後世(徳川期の歌舞・音曲・文學)に與へた影響は甚だ大で、少しく語を大にして云へば、近世に於ける歌舞音曲の祖とも云ひ得るのである。例へば出雲御國の歌舞伎は能の影響を享けてゐる。能が本來の精神を忘れて寫實一方に走れば歌舞伎となる。近世に於ける里神樂も能の影響を享けてゐる。余は、音楽史研究上、神樂を内侍所の御神樂と里神樂とに二大別してゐる。内侍所の御神樂は、能(猿樂)に影響を與へ、里神樂は能から影響を享けてゐる。京都の山本、名古屋の西川の舞の如きは、能の仕舞から脱化した踊りである。又能狂言は、茶番、大



神樂へ影響を與へてゐる。以上は、ほんの一例にすぎない。謡曲文は、徳川期の文學特に平民文學に大きな影響を與へてゐる。例へば、淨瑠璃をみんか、近松門左の如きは、謡曲文の影響を享けてゐる。一例として近松作の凱陣八島を分解してみると、

第二段——謡曲八島から

第三段——謡曲攝待から

第四段——狂言花子から

第五段——謡曲錦戸から

この中、攝待の下りの如きは、謡曲文と大差ない程、謡曲文に似てゐる。

### 五 謡の番數

應永の猿樂革命以來、新作された謡の數は甚だ多く、恐らく二千番を突破するであらう。佐木博士校閱の「新謡曲百番」の附録の「謡曲名寄對照表」は、古來作られた曲名を知るに最

も適當なものである。(もこれに漏れた曲) 要するに、現今行はれてゐる謡曲は、澤山の中で、最も味ひのあるものゝみが、残つたのである。現在各流で謡はれてゐる曲數は通例「二百番」といはれてゐるが、實際に當つてみると、流儀に依つて著しく違ふのである。

各流共に、徳川氏以前には、流儀の曲數などは一定してゐなかつたのである。各流で曲數を定めるやうになつたのは、徳川氏の時代に、幕府へ、流儀の家傳家藝等に就いて書き上げを呈上しなければならなくなつて以來のことである。

觀世流では、元章の時は、内外二百十番であつたが、清尙の時に百六十九番となつた。其後文化三年に清興が「七騎落」、「弱法師」、「絃上」の三番を加へて、百七十二番とした。後明治の初年に、清孝が、別能二十八番、新物七番、合計三十五番を加へた。寶生流では天明以前には、百九十八番であつたが、寛政六年に二百十番に増加し、明治になつて九郎が其中三十番丈けを素謡のみとし、現宗家に至つて、その三十番を廢してしまつた。下ガ、リの喜多流では、寛政七年には百九十五番であつたが、今では二百四番になつてゐる。寛政七年に百十四番であつた











道松通梅花玉三  
 成小井  
 寺虫町枝筐葛寺  
 雨錦善鳥雲籠櫻  
 知追雀太  
 鳥舟山鼓川  
 弱船阿卒班隅柏  
 法都婆小田崎  
 師橋漕町女川崎  
 景葵藤女富蟬百  
 士郎太  
 清上戸花鼓丸萬

四、四番目物

三加砧百隅  
 茂物狂寶生喜多  
兩流のみ金春流になし萬川  
 山寶生流  
のみ戀室攝花三  
 重荷君觀世金春  
兩流のみ待同上筐寺  
 水右浮籠櫻  
 無月近觀世寶生  
兩流のみ舟寶生流  
廢曲のみ太鼓川  
 籠綾飛弱柏  
 祇鳥川金剛喜多  
兩流のみ法師崎  
 王寶生金剛  
兩流のみ鼓寶生喜多  
兩流のみ王喜多流  
のみ

卒雨雲 墨梅住姨驚源吉千誓  
 都婆雀 染吉 氏野願  
 小月山 櫻觀世流  
のみ詣同上捨同上上同上養靜手寺  
 鳥木班 落身胡二大關松葛羽  
 追 葉蝶金春喜多兩  
流になし靜寶生流  
廢曲御小町風城衣  
 舟賊女 山吉藤佛鸚雲熊龍遊  
 玉當富士 野天觀世寶生  
兩流のみ原寶生流廢曲  
春流になし小町金春流  
になし野湯谷田柳  
 葛麻鼓 姫同上人同上夕檜卷草三西  
 蟬道梅 雪祇王寶生喜多兩流のみ、  
喜多流では二人祇王顏同上垣同上絹同上紙輪櫻  
 成 丸寺枝

略三番目物

三番目物でなくて、時にそれに代用する、物。











觀世、寶生は善知鳥、金春、金剛、喜多は烏頭。

觀世、金剛、喜多は鳥追船、寶生は鳥追。

寶生、金剛、喜多は枕慈童、觀世は菊慈童。

觀世、寶生は善界、金春、喜多は是界、金剛は是我意。

他流は滿仲、觀世は仲光。

他流は隅田川、觀世は角田川。

昔と今とで曲名の違つてゐるのもある。試みに古番組を掲げて曲名の相違を指摘してみよう。  
永享四年三月十四日大光明寺地藏殿で觀世が仕りし猿樂の番組

み	す	ゝ	かつほの玉	すみだ川	三藏法師
自然居士	九郎判官東下向	重	衡	よ	こ山
井手玉水	曾我五郎元服	し	づ	か	

右番組の中、かつほの玉は今の合浦、九郎判官東下向は烏帽子折、重衡は千手、曾我五郎元

服は元服曾我、しづかは今の吉野靜である。みすゝ、三藏法師、よこやま、井手玉水、曾我五郎元服は、現在行はれてゐない曲である。

古名、異名一覽

左に今と昔とで曲名の違つてゐるものをかゝげておく。

今	高砂 志賀 東北 半部 松風 六浦 百萬 錦木	昔	相生 黒主(黒主志賀) 軒端梅 半部夕顔 松風村雨(鹽汲) 六浦楓 嵯峨物狂(嵯峨大念物) 錦塚	今	女郎花 通小町 元服曾我 放下僧 戀重荷 當麻 船橋 項羽	昔	頼風 市原少將(四位少將) 曾我五郎元服 はうか おもに 中將姫 佐野船橋 美人艸
---	--	---	---	---	--	---	--



黒塚 のもり 野守 皇帝 放生川 頼政 代王 蟬丸 護法 藍染川 卒都婆小町 正尊 木曾願書 箴 求塚	糸車 野守鏡 明王鏡(玄宗) 放生會(八幡) 源三位 葛城鴨 逆髮 名取老女(?) 染川 小町物狂(小町卒都婆) 土佐坊 埴生 箴(梅(梶原二度のかけ)) 若菜	春日龍神 寢覺 淡路 俊成忠度 難波 加茂 忠度 源氏供養 千手 定家 葛城 小督 邯鄲 船橋	明惠上人 寢覺床(三返) 楳 五條忠度 難波梅 矢立鴨 短册忠度 紫式部 千手重衡 定家葛 葛城雪 仲國 邯鄲の枕(蘆生) 佐野船橋
---	---	--	---

七 番謠、小謠、素謠

番謠と番囃子

番謠とは、初めから終り迄すべて一番の謠をうたふ場合に云ふ言葉である。又舞人なしに、大小鼓、太鼓、笛の四拍子で、一番の謠を囃す場合には番囃子と云ふ。番謠の場合には、謠が主であるから、十分面白味を發揮することが出来るが、番囃子となると、囃子が主であるからして、囃子に合ふやうに謠つてゆかねばならない。

素謠とは、大小鼓のアシラヒなく、謠のみを謠つてゆくことである。元來謠の根本には相違はないが、素謠、囃子、能に依つて、謠の心持に相違がある。これらの各場合々々をわきまへ

羅生門 大江山 石橋	綱 おゝえ(酒天童子) しゝ	小鹽 夜討曾我	大原野花見(?) 打入曾我
------------------	----------------------	------------	------------------



て、謠つてゆかなければならない。古人は、

「能の謠は眞の謠なれば、嚴格に正しく、仕形によりて諷ふべし。

囃子の謠は行の謠なれば、定則に、拍子を目的として謠ふべし。

素謠は、草の謠なれば、心持を主として平和に諷ふべし。」

と教へてゐる。即ち、能の謠を眞、囃子の謠を行、素謠を草にたとへたのであつて、味ふべき言である。

### 番組の編成

番組の編成に就いては後に述べるが、素謠の番組も、(一)神物、(二)修羅物、(三)鬘物、(四)鬼物、(五)義理、(六)祝言と正式に序破急をあらはすべきが本義である。然し一般に、素謠會は、復習が目的であるからして、敢えてそれに拘束せらるゝ必要はない。唯大體に於いてこの精神を忘れぬやうすればよい。寶生會の素謠會は、三番を原則としてゐるが、時間の關係からして最も適當である。

### 歌仙と半歌仙

聲の鍛錬と云ふことを目的として、數謠ひと云ふことを催すことがある。

歌仙——三十六番

半歌仙——十八番

はその例である。一日に三十六番謠ふと云ふことは苦痛であるが、聲を鍛錬すると云ふことに對しては大きな効果がある。けれ共、實力養成には、五六番をしんみりと謠ふと云ふ方が効果が多い。云ふ迄もなく、歌仙謠ひ會の場合には、餘程位を早く／＼謠つてゆかないと謠ひきれない。

### 素謠會の席順

今では、素謠會の際に於ける座順はマチ／＼であつて、便宜上に依ることが多いやうであるが、それも出来れば、正しい式に従ふ方がよい。

玄人が、素人に模範として素謠を聞かせる場合には、シテ方ワキ方が後列に坐ることが方式



のやうになつてゐるが、素人の素謠會に於いては、左の方式に従ふをよしとする。

面	正				
ワキ	シテ	シテに附くもの	地	地	即ち、シテとワキとは中央へ出で、
		シテツレ	地	地	シテは右ワキは左に坐り、一段さが
		ワキツレ	地	地	つてシテツレはシテの右の方に、ワ
		ワキに附くもの	地	地	キツレはワキの左の方に坐り、子方、

男などシテに屬するものは、シテの右の方に、ワキにつくものはワキの左の方にすわり、地謠は一番うしろに坐る。地頭は、最後列の左の首席に坐るのが古法であるけれ共、地を統一するには、中央に坐る方が便宜であるからして、今では多く中央に坐るやうである。地を謠ふ人は、常に地頭についてゆくのであつて、自分勝手に謠つてはいけない。

小謠・獨吟・連吟

小謠とは、番謠の中の短かい一節をぬき出して謠ふのであつて、酒席などで謠ふのは、即ち小謠である。然し、小謠にも一定の方式はあるのであるからして、其場合々々を考へて謠はね

ばならぬ。

獨吟となると、謠をきかすのが主であつて、謠ふ箇所も小謠よりはながい。小謠は、酒席などで餘興の意味できかせると云ふ場合が多いが、獨吟となると、酒席などでは謠はない。

連吟は、二人以上で謠ふのであるが、通例二人で謠ふ場合が多い。シテとツレ、シテとワキと連吟するのであつて、松風の鹽くみ車、通小町の「もとより我は」以下、ロンギなどがよく謠はれる。

小謠を謠ふにも方式がある。其大要に通じてゐなければならぬ。

(イ) 小謠を謠ふには、其席の如何と、季節の如何とを考へて、適當したものを謠はねばならぬ。(後に述べる去り嫌いの原則を念頭におかねばならぬ)。

(ロ) 祝言の席上では目出度き詞ある謠を、心正しく、少しも邪心なく、剛吟をかるく、引き立て、謠はねばならぬ。

(ハ) 高砂の四海波を發聲する人があつたら、「枝を鳴らさぬ」から附けるべきである。これ





は「枝づけ」と云ふて古來の習ひである。

(三) 小謡を最初に謡ふ際には、上歌から謡はねばならぬ。下歌から謡つてはならぬ。二番目からは、この法則にとらはれなくともよい。

(ホ) 追善の素謡は、弱吟から謡ひ出す可きで、祝言の場合とは反對である。

(ヘ) 人が小謡を謡ひ出した時、同音をつける場合には、場所を見はからつてつけなければならぬ。返しがあれば返しから、返しがなければ三行目位からつけるのが例である。

(ト) 酒宴・賀席などにての、肴 謡(餘興)は、いかにも短かきものを謡ふべきである。

(チ) 長き小謡を謡ふことは遠慮すべきである。

小謡を所望されたらば、其場所柄をよくわきまへて、謡はねばならぬ。學校の卒業式などでは、烏帽子折の

「加様に祝ひつゝ」から「これぞ弓矢の大将と言ふとも、不足よもあらじ。」

以下を謡へば、其席にふさはしい。或る工學士が、架橋工事に出かける送別會の席上で、

頃も春なり川風の、花ふきわたせ舟橋の、法のゆきゝの、道作り給へ山伏、峰々めぐり給

ふとも、渡り通らでは、いづくへ行かせ給ふべき。」

と船橋の一曲を謡つた人があると聞いてゐる。これなどは、機轉のきいた一例である。

小謡に謡ふ箇所

觀世小謡萬歳樂、隨一小謡繪抄をもととして、小謡に謡ふべき箇所を左に示しておく。

春の部

高砂 ところは高砂の。 四海波しづかに。

難波 難波津に咲くやこの花。 祝ふなる

老松 心ぞしるき。 一花ひらけては。

松ヶ根の岩間を傳ふ。 天つみ空も

曇なき。うれしきかなやいざさらば。

竹生島 名どころ多き數々に。 名こそさゝ

波や。 綠樹かげ沈んで。

右近 ひをりせし右近の馬場の。

雲林院 げに枝を惜しむは又。

田村 白妙に雲も霞も。 櫻の木の間に漏

る月の。

鞍馬天狗 花さかば。 花に三春の約あり。



八島

釣のいとまも。

若葉松

神まつる今日あらたまの。

羅生門

曇なき君のみかげは。 ともなひ語

白髭

らふ人々に。 にほひも深き紅に。

志賀

瑞垣の年もへにけり。

西行櫻

げにや今までも。 あたら櫻の

采女

はこぶ歩みの數よりも。

熊野

四條五條の橋の上。 車やどり馬と

松竹

どめ。 寺は桂の橋柱。 稻荷の山

春毎に君を祝ふや。

の薄紅葉の。

稲荷の山

春毎に君を祝ふや。

嵐山

となせに落つる白波も。

千本の花

西王母

の種うゑて。

羽衣

三千年になるてふ桃の。

寢覺

風むかふ雲の浮波。

船橋

日も夕ぐれに程もなく。

藤波

頃も春なり川風の。

昭君

いく春も花の盛と。

泰山府君

春やくるらん糸柳の。

春日龍神

あはれ一枝を。

櫻川

御法の花も八重櫻の。

淡路

さくら川せいの白波。

胡蝶

さかりに引かれて苗代の。

胡蝶の舞人いろくの。

夏の部

忠度

須磨の若木のさくららは。

藤

さかり久しき藤波の。

小鹽

ちりもせず咲きものこらぬ。

氷室

かはらぬや氷室の山の。

杜若

在原の跡なへだてそ。

加茂

みたらしの聲も涼しき。

加茂物狂

花やかなりし春すぎて。

氷室

ましてや春すぎ夏たけて。

雲雀山

月は見ん月には見えじ。

鷺

鷺のぬる池の汀に。

源太夫

時は三伏の夏の日の。

水無月稜

みな月のなごしの稜する人は。

秋の部

清經

有明月の夜たゞとも。

飛鳥川

しての山田の時すぎて。

雷電

風月の窓に月を招き。

蟻通

源流やうやく茂る木の。

鶉飼

不思議やな篝火の。

女郎花

なまめき立てる女郎花。

雨月

折しも秋なかば。 うき世のわざを

弓八幡

賤の女は。 木の葉衣の袖の上。

班女

秋高き枝も連なる。

東方朔

夏はつる扇と秋の。

三井寺

秋きぬと目に見ぬ空は。

月は山風ぞ時雨に。



嫉捨

今とても慰めかれつ。

大江山

さてお看は何々ぞ。

融

雪とのみつもりぞきぬる。

野宮

秋の花みなおとろへて。

七人狸々

秋の夜しばし明くるなど。

松風

みつしほの夜の車に。

殺生石

ものすさまじき秋風の。

井筒

迷をも照らさせ給ふ。

道明寺

神さぶる松は十かへり。

紅葉狩

下もみぢ夜のまの露や。

三輪

がれを汲む酒を。

芭蕉

秋さむき窓の内。

見ぬ色の深きや法の。

一河のな

阿漕

ものゝ名も處によりてかはりけり。

卒都婆小町

月もろともに出でゆく。

金札

青によし奈良の葉守の。

露

白玉か何ぞと人の。

善知鳥

月のためにはそとの濱。

菊月

山かづら明けゆく庭の。

翁草

時しりがほに白菊の。

礎

月のいろ風のけしき。 げにやいつはりの。

玉葛

人や見ゆらん身のほども。 河おと

通盛

聞えて里つゞき。

菊慈童

うきながら心のすこし。

靈山の妙法。

小督

秋や恨むる戀やうき。

宮城野

秋風ぞ吹く白川や。

源氏供養

げにやあしたも秋の光。

定家

庭もまがきもそれとなく。

花筐

松も千年の縁にて。

六浦

空さだめなき村しぐれ。

逆針

すぐに御蔭もみぢ葉の。

錦木

機織松虫きりくす。

松虫

盃にむかへば色も猶まさりぐさ。

項羽

家づとなれば色々の。

冬の部

大社

神の代を思ひ出雲の。

定家

庭もまがきもそれとなく。

三笑

頃もはや霜降月の。

龍田

氷にも中たゆる名の。

賢城

しもとを集め柴をたき。

竹雪

いつを吳山にあらねども。

鉢木

それは雨の木蔭。 さて松はさしも

昭君

げに。

江口

涙の露の月のかげ。

和布刈

江錦繡の山。 春の野にいでみ摘む若菜。

祝言の部

高砂

ところは高砂の。(年賀) 四海なみ静

難波

にて。 難波津にさくやこの花。 一花ひら



志賀

くれば。(婚姻移徒)  
都鄙圓満の雲の下。

吉野

かゝるながめは盡きぬ世の。(婚姻)

放生川

枝をならさぬ松の風。(神祇)

老松

松が根の岩間をつたふ。花も千代  
までの。

羽衣

風むかふ。 縁は波に。

西王母

三千年になるてふ桃の。(賀)

鼓瀧

十かへりの花を合むや。(賀)

松竹

春毎に君をいはふや。(移徒)

胡蝶

こてふの舞人いろくの。

采女

運ぶ歩みの數よりも。

嵐山

千本の花の種うゑて。

三月三日 桃の花さくや彌生の。

佐保山 玉かづら來る年の緒の。

萬歳を呼

ばふ三笠山。

羅生門 くもりなき君の御かげは。

春日龍神 御法の花も八重櫻の。

葛城 よしや吉野の山かづら。(門出。酒宴)

白鬚 花さそふ比良の山風。

氷室 かはらぬや氷室の山の。

藤 盛久しき藤なみの。

(以上春の季)

加茂 頼む誓は此神に。(神祇)

源太夫 時は三伏の夏の日の。

加茂物狂 花やかなりし春すぎて。

(以上秋の季)

大社 神の代を思ひ出雲の。

難波 雪は豊年の貢物。

鉢木 さて松はさしもげに。

雪山 我衣手にふる雪を。

神在月 いく世とも限はいさや。

羽衣 げに雪をめぐらす。

和布刈 春の野にいでゝつむ若菜。

(以上冬の季)

高砂 正木のかづら永き代の。(婚姻)

浦島 契り結ぶの神こゝに。(同)

玉井 長き命を汲みて知る。(同)

貴船 こゝに貴船の宮柱。(同)

氷室 袖ひぢて結びし水の。(六月一日)

氷無月被 みな月のなごしのはらひ。(六月晦日)

(以上夏の季)

弓八幡 松たかき。(神祇)

東方朔 秋きぬと目に見ぬ空は。

七人狸々 秋の夜しばし明るると。(酒宴)

金札 あをによし奈良の葉もりの。

碓 げにや偽の。

菊慈童 靈山の妙法。

花筐 よろづよの恵みも久し。

龍田 山も動ぜず海邊も。

逆鉾 すぐにかかげもゝみぢ葉の。(神祇)

女郎花 三千世界も目の前に。



蘆刈

然れば目に見えぬ。(婚姻)

佐保山

のどけき色に染めなして。(同)

邯鄲

嵐になびく羽衣の。(同)

大蛇

花の袂をひるがへして。(同)

皇帝

そのまゝ治まる國の神。(同)

蘆刈

ことぶきなれや此ちぎり。(同)

弓八幡

世々にあまねき花色の。  
洛陽の南の山高み。 治まる御代に  
立ちかへり。

吳服

けしき立つなり雲鳥の。 綾の錦の

西王母

唐衣。  
かゝるためしは貴見城。 ひろき教

唐衣

の誠ある。

唐衣

の誠ある。

唐衣

の誠ある。

唐衣

の誠ある。

神に手向の分

松尾 久しき國に跡垂れて。

小鍛冶

たゞたのめ此君の。

和布刈

開けし神代の如くにて。(神祇)

蟻通

中にも貫之は。

岩舟

民ゆたかなる楽しみを。 神と君と

養老

長生の家にこそ。 げにや玉水の。

富士山

西天唐土扶桑にも。

嵐山

千本の花の種うゑて。

手

晋の七賢が楽しみ。 袖ひちて結ぶ

手

の。

手

の。

手

の。

手

の。

手

の。

手

の。

葵上 菩薩もこゝに來迎す。

大社

何くにか神の宿らぬ。

道明寺

ありがたし〜。

眞名井原

祈らずも心の水の。

佛に法樂追福の分

大般若

悪事悪魔は萬里に退き。

博多物狂

一念稱名の力にて。

大會

鷺の御山を移すなる。

弱法師

濟度の舟をもよするなる。

身延

正直捨方便無上の道に。

水無瀬

紫雲たなびき音楽きこえて。

加茂

年の矢の早くも過ぐる。

百萬

彌陀たのむ人は雨夜の。

芭蕉

燈をそむけて向ふ。 されば柳は

縁。

井筒

迷をも照らさせ給ふ。

舍利

月雪の古き寺井は。

田村

げにや安樂世界より。

柏崎

己身の彌陀如來。

遊行柳

此界一人念佛名。

花月

朽木の柳は縁をなし。

石橋

向は文珠の淨土にて。

誓願寺

まことに妙なる此教。

實盛

知る人も知らぬ人をも。

高野物狂

飛花落葉のらんふうまで。

卒都婆小町

砂を塔と重ねて。

葵上

菩薩もこゝに來迎す。



藤戸 願のまゝにやすくと。  
當麻 たゞ西方に迎へゆく。

江口 光と共に白妙の。  
舟橋 眞如法身の玉橋の。

謠會の種類

謠會(京阪にては謠ひ講)には、研究を目的とするものと、娛樂を目的とするものとある。何れにせよ、會を無事に、愉快にをはらせるに當つては、幹事(世話人)の努力をまつこと大である。會員は、各自に幹事の立場に同情して、不平の心を起さぬやうしなければならない。謠會に出席する人は、服装に就いて十分考慮しなければならない。正式には、紋服に袴でなければいけないのだが、月並の會などでは、略装でもよい。縞服でもよいからして、袴丈は必ずつけなければいけない。近來、謠會を廻つて見ると洋服を着た人、袴をつけない人を多く見うけるが、之れ丈は、各自に遠慮して貰ひたい。如何なる場合にも「着袴」と云ふことを嚴重に守つてゆかねばならない。

同門の會ならば、師匠が、御弟子の力を知つてゐるのだから、其力に應じて役をふりあてることが出来るが、さうでない場合には、役の振り當てがむづかしい。いろ／＼不平が起るのも役の振り當てからである。かう云ふ際に、公平を期する爲めには、抽籤法がよいやうである。

謠曲に因む福引

謠會後の宴席の餘興としては、いろ／＼の遊びがある。お正月の初會の後の宴では、福引が面白い。之は謠曲の或る文句を紙に書いて之を捻り、籤とし、兼ねて其文句にちなみたる景品を備へをいて、當り籤の人に渡す仕組である。其渡し方は、籤に當りたる人に、其文句を讀み上げしめ、渡し人は、其因める品に、面白く説明を附して渡すのである。

例へば、

「安宅」 散々に打擲す通れとこそ

景品(煙管又は鐵砲)

「安宅」 最愛の夫人に別れ

景品(糸巻「いとしく」の意)

「安達原」 足に任せて逃げてゆく

景品(風船玉)



「阿漕」 度かさなればあらはれて

景品(懸想文)

「羽衣」 はるかに三保の松原に

景品(富士三個「フジミユの意」)

數字廻し其の他の遊び

數字廻しと云ふ遊びもある。之は首席者から、數字を謠の頭におき、順次に謠ひ廻すのである。

例へば、

一院の御使

と甲が謠へば、乙は

二本の杉につきにけり

と云ふ工合に、數字を謠の頭においてすゝむのである。

三つの車に法の道

四の宮や河原の宮居末はやき

五つの鼓はいつはりの

六道の辻とかや

七面の地に

八大龍王は海上に飛行し

九曜の曼陀羅の光明

若し謠ひえぬものがある時は、罰盃を科するのである。

「いろは」廻しは、「いろは」の文字を頭において、首席から順次に謠ひ出し、若し出来ない者があれば、定規の處罰をうけるのである。例へば、

(甲) いまふるも

(乙) ろせいはゆめさめて

(丙) 花さかば

の如く、いろはの順にしたがつて順々に謠ふのである。



「尻繼」と云ふ遊びも面白い。甲の人の謠の終りの假名をとり、乙の人、之を頭字にかぶせて、すかさず謠ひ出す法である。一例をあげれば、

(甲) かけども落葉のつきせぬは誠なり、松の葉の散り失せずして色はなほまさきのかづら永き代の

(乙) 飲めば甘露もかくやらんと

(丙) 年の矢の早くも過ぐる光陰

(丁) 武藏野はけふはなやきぞ云々

「の」の字廻し「の」もか廻しは、最も通俗的なものである。首席より謠ひ出し、「の」の字がくると、其の前でやめ、次席の者は「の」の字を頭につけて謠ひ出し、再び「の」の字の前でやめて次ぎへ渡す。若し心づかずして、頭字の他、「の」の字を謠ふ時は、過ちとして規定の處罰をうけるのである。「の」もか廻しも、「の」の字廻しと同じ方法である。「の」もか」の三字を謠はぬやうするのだからして、過ちする人も多く、遊びとしては面白い。

少し凝つた遊びに、「十二支廻し」と云ふのがあるが、之は餘り行はれない。十二支を謠の中によみこんで、謠つてゆくのだが、今では十二支を知らない人も多くゐるやうなありさまだから、興味が少ない。

例へば

子に伏し寅に起きなれて

丑みつすぐる夜の夢

風もうそぶく寅の時

兎も波を走るか

龍女が立舞ふ波瀾の袖

巳の日の祓や木綿四手の

繪馬はかけたりや

羊の歩み隙の駒



それは猿猴の名をもつて  
鳥は宿す地中の樹  
されば煩悩の犬となつて  
落つる所を猪の早太

### 八 地 謡

地謡は、シテ、ワキ其他役々の謡はぬ所、即ち謡本に「地」「同」と書いてある所を謡ふのである。いはゞ地謡は役者を補翼する役目をなす者であるから、吾が謡を立てることにのみ汲々してはいけない。シテ、ワキ等の爲めに、力を添へ、一番の能なり、謡なりの完全を期するのが地謡の任務である。

舊幕府の頃には各座に、専門の地謡役者がゐて、其権限も大したものであつた。太夫と雖も、地謡に對しては、干渉が出来ない程であつた。けれ共、今では、シテ方を勤める役者も地謡に

加はると云つたやうなわけで、昔とは大分趣きが變つてきた。

### 能の地謡

能の地謡は、地謡座にゐて一列又は二列に並び、地頭に隨つて謡ふのである。素謡の地謡は、役者の後ろに坐して、一列二列(人數に應じて)に坐するのである。

地謡の人數は、別に一定してゐないが、能の場合には二列で、十人乃至十二人が普通である。(一列五人乃至六人) 囃子、仕舞、素謡も一定してはゐないが、大抵二列で、十人乃至十二人見當である。仕舞では一側の場合が多い。素人の素謡會は、謡ふ人の人數が多いからして、三列四列、時としては、五列六列と云ふこともある。

### 地頭の職務

地謡には、地頭が必要である。地頭は、之を扇にたとへれば「要」である。地頭が中心となつて、地全體を統御するのである。昔は地頭は、前列の左端に坐つたものであるが、今では、後列の眞ん中へ坐ることが流行してゐる。之は、地を統一する關係上、適當な位置だと思はれ



る。

地謡全部は、地頭に絶對的に服従しなければならぬ。「我を殺して地頭についてゆく」と云ふことが、地謡役者の心得るべき第一義である。地謡の中に一人でも我を發揮する人があると、地謡は不統一になり、四分五裂してしまふ。

地謡役者の作法

何處の地謡でも、舞臺に於いては、切戸から出て切戸から入るのである。能の時には、大夫の座着くのをまつて出る。其順は地頭を先きに、前側が出切ると後側の左座に坐るものがそれにつゞき、後側の右端に坐るものが一番終りに出るのである。入る時は、笛方が立つと共に立ち、下座の者から先きに、出た時の順を逆にして、入るのである。今では能役者の一部の者が怠けて、初めは前側の者丈けが出て、いよゝゝ初同が始まらふと云ふ時に後側のものが出てくる。中入になると、後側の者がヒツコミ、シテの出る頃に出てくる。之は甚だ違法であつて、かゝる悪弊は一掃しなければならぬ。

以上は、普通の場合であるが、翁の時丈けは、地謡も幕から出る。そしてこの時に限つて、囃子方の後部へ座着く。三番叟がすみ、後見が引くと常の座につき、脇能の地謡を謡ふのである。

地謡役者は、舞臺へ出て座着いたならば、扇を抜いて、右側におき、夫れから前へ直し、謡ふべき所から二句前で扇をとり、一句前で構へるのである。この際に於ける扇の構へは、所謂「行の構へ」である。一旦扇を取り上げて、地紙の下の構を右手で持ち、要尻を板の上へつけ、縦に右の膝頭へ當てるのである。但し寶生流では、直ぐ地紙の下の所を摘み上げて構へてゐる。扇の持ちおろしに就いての注意を左に示しておく。

- (一) 次第、一セイ、問答、カケリ、舞の類をはじめ、間のある所では扇を前におく。
- (二) サシ、上羽、ロンギのやうに、間の無い所は、扇を持ちつゞけてゐる。
- (三) シテが中入する時は、囃子方が床几を外すのをまつて、扇をおく。



(四) シテが幕から出た後、シテへ謡ひかける能では、幕が揚ると扇をとつて構へるのである。

地謡の任務

地謡が巧くゆかないと、シテの藝を打ちこわしてしまふ。地謡は、シテを助けてゆくのが本分なのであるから、其精神を一刻たりと雖も忘れてはいけぬ。又合方に對しては、「地は合方につくべからず」、「合方は地につくべからず」と云ふのが原則であつて、不即不離と云ふ所に云ふに云はれぬ味ひがあるのである。けれ共、之は理想であつて、中々のことではこの域に達することは出来ない。地謡としては、合方を十分に研究して、間をはずさぬやうしなければならぬ。

能の場合には、地謡には、地を謡ふ以外に役目がある。夫れは、ワキ方、ツレ等すべて、協座につくものゝ世話をすることである。腰桶の出し入れ、道具の出し入れなどが夫れである。地は能の場合、素謡の場合、仕舞の場合、囃子の場合と、場合々に應じて謡つてゆかなければならぬ。

ればならぬ。場合々に應じて謡ひわけてゆくと云ふことは、容易ならぬことであるし、之は師傳と自己の研究とにまたなければならぬ。

九 謡の組織(文章方面よりの解剖)

謡曲文の形式を解剖してみると、

- 一、ワキ次第
- 二、同名乗
- 三、同道行
- 四、シテ、ツレ一セイ
- 五、同サシ
- 六、同下歌
- 七、同上歌
- 八、ワキとシテとの問答
- 九、地の同吟
- 十、クリ
- 十一、サシ
- 十二、クセ
- 十三、ロンギ
- 十四、中入



十五、ワキ待謠

十六、後シテ出で、謠いろくあり

十七、キリ

と云ふ順序をとるものが多い。曲に依つて、多少の相違あることは云ふ迄もない。今、上述の順序にしたがつて、各部分々に就いて説明を試みよう。

次第

能、謠に於いて登場第一の演者が、扮装人物の心情或は感慨を謠ふ一小節の謠を次第と云ふのである。次第は、劈頭にあるのが原則だが、まゝ中途にあつて、地謠でこの時の状況や情緒を謠ふものもある。字数は通例七字五字(二返)七字五字から成つてゐる。

千手、井筒、朝長の如く、シテが次第を謠ふものもあるが、ワキの方に多い。もつとも次第なくして、名乗から謠ひ出す脇も多い。

あかつきごとのあかの水／＼月も心やすますらん

(井筒)

ちらぬ先きにとたづねゆく花にや風のさそふらん

(春榮)

寶生新氏の話によると、ワキ寶生で、ワキの次第のあるものをあげると九十五番からあるさうだ。ワキ次第の謠ひ方に就いての注意を左に示しておく。

脇能の次第はのつて謠ふ方がよい。

二番目は軽く謠ふ方がよい。

三番目は確りうたつて冴えない方がよい。但し小塩のやうな素袍男は軽めに謠ふ。

四番目、五番目は荒く謠ふ方がよい。

笠物―笠を被つて出るワキ(例、拍崎、清經)は、何番目にかゝはらず、位をとつて冴えずに謠ふをよしとせられてゐる。又着流僧は寂びて謠ひ、大口僧は位をとつて謠ふのがよいとせられてゐる。猶時と場所に依つて、調子に就いて工夫することが必要である。

道行

過ぎゆく行路の景色、有様などを謠ふ一章の曲節である。句数の長短は一定せぬ。謠曲文の道行は、文學上著名なものであつて、文章は短い、其中に無限の味ひがある。



「信濃なる淺間の岳にたつけむりく、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井川、捨る身になき友の里、今ぞ浮き世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、くだすいかだのいたはなや、佐野のわたりに、つきにけり。」(鉢ノ木)

道行は、概して次第よりも冴えて、乗りをつけて謠ふのであるが、曲柄に依つて、位には相違があるけれ共、どの道行でも、能であると、舞臺先きへ出て立戻る所、例へば舟辨慶の「潮も波も共に引く大物の浦に」と云ふやうな所は、シツカリ心して謠ふのである。

道行に二種ある。一は本着、一は半着と稱するものである。道行の末に「着にけり」と云ふ文句があつて、着き所の解つてゐるものを本着、「着きにけり」と云ふ文句のないものを「半着」と云ふのである。

詞

謠本で節のない部分を詞と云ふ。この詞に、名乗、問答、呼掛、カタリの四種がある。名乗とは、シテでもワキでも、舞臺に出て、我が名を名乗り、素性を告ぐる文句である。

是れは、武藏の國隅田川の渡し守にて候 (隅田川)

名乗は、詞ばかりで、節のないのが普通であるが、曲に依ると節のあるものもある。但し是は例外である。

名乗は多く次第に次ぐのであるが、中には次第なくしての名乗もある。曲に依ると名乗のないものもある。之は鶴龜を始め二十二三番からある。

やかましく云ふと、名乗りにも、眞行草の三通りある。夫々位が違ふのである。ツレにも名乗のあるものがあるが、一般に軽く謠ふ。

問答とは、シテ、ワキ互ひに語り合ふを云ふ。曲の位、人物の如何等に依つて、謠ひ方に工夫を要することは云ふ迄もない。問答は多く詞から成り立つてゐるからして、節のついてゐる所よりも樂に謠へさうであるが、其實はなかくむづかしいのである。

ワキ「里人を相まつ所に、老人夫婦來れり、いかに是なる老人に尋ね申すべきことの候。シテ「こなたのことにて候か、何ごとにて候ぞ。云々(高砂)」



又遠く、橋掛から、舞臺の人を呼びかけて出てくる時の詞を呼びかけと云ふのである。これ亦曲に依つて、心持や位に相違があつて、中々むづかしい。

のう／＼あれなる御僧に申すべきことの候。(熊坂)

又一場の物語として、過ぎにしことを語つて聞かするをカタリと云つてゐる。カタリとは、「物語」と云ふべきを略したのである。

「昔この所にまなごの莊司と云ふ者あり」  
から、

「なんぼう恐ろしき物語にて候ぞ」

迄が語りである。之は一例であるが、他は類推すべきである。カタリの謠ひ方はむづかしい。之を或る程度迄謠ひこなせれば、立派な謠ひ手である。

一 聲

登場第一に謠ふ一種の謠の體で、句法は五字か七字五字か、又は五字七字である。一聲と云

ふものゝ中には、

- 眞の一聲、 一聲、 一聲葛越、 一聲狂女越、 一聲頭越。

と種類がある。之れは噺子様に依つての區別であるが、謠ひ方にも自ら相違のあること云ふ迄もない。

眞の一聲は協能特有のものである。(例外三番目の松風は眞の一聲である)随つてその謠ひも崇高の氣韻に富まねばならない。

一聲、これは普通の一聲で、田村、東北後シテの如きはそれで出るのである。噺子様に依つて、此中に、本越、片越、不越と種類がある。

一聲葛越は、三番目の女物の後シテの出に打つものである。一聲狂女越は、狂女物のシテの出に用ひるもので、噺子やうの上に於いて越の手がはるのである。一聲頭越は、橋辨慶、正尊、烏帽子折と云つたやうな切合物に主として用ひるのである。切合物以外で、シテが一聲頭越で出るのは、山姥と忠度とである。



二ノ句

二ノ句とは、概して云へば、眞の一聲に附隨してツレが謠ふものである。(例外として葵上の如きものがある。之は一セイの謠ひ出して、二ノ句もシテが謠ふ。)高砂に例をとれば、ツレの「波は霞の磯がくれ」は、二ノ句である。

サシ

サシゴエ(下がよりで云ふ)とも云ひ、水の流るゝが如くサラ／＼と謠ふ所である。サシの位置は一定しないが、通例一セイ、二ノ句、連吟を謠ひすんで其次ぎになる。又後半の初めにあ

ることもある。サシを分類すると、サシ、サシゴト、サシゴエ、詞のサシと四種類ある。これらに就いては餘りに専門的になるので説明を抄略する。

上歌下歌

通例、サシの次に下歌がある。高砂の「音信は松にことゝふ」の如きは下歌であり、「所は

高砂の、／＼」からが上歌である。上歌下歌は、一々拍子に合ふ所で、節も細かである。

地

地謡役者一同で同吟する所で、一番の謠ひのきかせ所である。一番の謠ひの中で一番最初にある地を初同、二番目にある地を二ノ同と云ふのである。

ワキとシテの問答

初同がすぎると通例、ワキとシテとの問答がある。これは通例詞であるが、心持をあらはすことがむづかしい。

クリ

クリはサシの前にあつて、サシ及びクセの調子を準備する爲めの曲節である。クリとは繰り返す意味で、クリを分界として見れば、クリの前で一段落がつき、クリから又始めのやうに説き起してくるのである。又クリを序と書くのは、クセに對して其の序に當ると云ふ意味なのである。



シテ「今は何をかつゝむべき是は源三位頼政………(頼政)

ツレ「恥かしや申さんとすればわくらはに………(松風)

クリのあとに、通例サシがある。これは

サシコト(少し節がゝる)

サシコエ(幾分か詞に近い)

### クセ

クセは曲の字を書く。この曲は曲舞の曲である。云ふ迄もなく曲舞は白拍子舞などゝ同じやうに鎌倉南北朝時代へかけて流行したものである。クセは、能樂一番の中で主要なる部分をなすのである。能では居グセと舞グセの二つに分ける。シテが坐つたまゝで所作をするのが居グセ、シテが立つて舞ふのが舞グセである。

クセは始めは下音もしくは中音で始まり、中程で、シテの謠ふ文句を「アゲ」と唱へる。(詳しくはクセアゲ或は上羽)クセアゲ以後は上音となるのである。通例アゲは一つであるけれど

も、まゝ二つあることがある。アゲの二つあるのを二段グセと稱してゐる。

クセの全體を序破急にわけることゝなつてゐる。謠ひ方、心持に相違があるのである。一例として二段グセの場合をあげておく。

#### 山姥

遠近のたづきも知らぬ山中に——金輪際に及べり 序

抑 山姥は——いたらぬ山の奥もなし 破

上羽「然れば人間に非ずとて——花は紅の色々 急

又或時は織姫の——人の云ふらん 破

上羽「世をうつせみのからころも以下 急

#### ロンギ

佛教のロンギになぞらへて作つたものである。通例クセのあとにつゞいてロンギがあり、其末が中入となるのが順當である。又ロンギの末が切になるものもあり、其他一二の形式がある。



ロンギは、シテは眞の位で謠ひ地は草の位で謠ふのである。

中入

●半入りとも書き、一番の能の前半と後半との境をなすもので、シテが幕又は作り物へ入ることを云ふのである。中入の時の謠を「中入の文句」と云ふのである。

待謠

中入がすんでから、ワキの謠ひ出す歌の文句を待謠と云ふのである。謠曲文中簡にして無限の味ひあること、道行文と好一對である。

思ひよるべの浪枕、汀も近し此庭の、扇の芝をかたしきて、夢のちぎりを待ふよ。

(頼政)

クドキ

述懐、懷舊、感慨にたへず、思ひ迫つてうつつたふるが如く、うらむが如くに述ぶる一節である。クドキはサラリとゐつかぬやうに謠ふのがよい。

此上は何をかつゝむべき云々

(松風)

此程は三人一所にありつるだに云々

(俊寛)

ワカ

和歌の義で、舞がすんで謠ひ出す一節である。

舞シテワカ「春の夜のやみにあやなし云々

(東北)

キリ

一曲最後の一節である。キリには大體乗地、半乗、不乗の三種ある。

乗地——羽衣の「あづま遊びのかすく」以下の如きもの。普通につてユツタリ謠ふ。

半乗——田村の「ふりさけ見れば鈴鹿山」以下の如く少し運びをつけて乗る調子で謠ふ。

不乗——百萬の「よくく物案するに」の如く乗らずに謠ふものである。

文

文は云ふ迄もなく手紙のことである。例へば柏崎の



さてもくく父御前——御心を慰めおはしませ  
(柏崎)  
の如きである。文は大體サラリと節は謠はずに、聲に文のあるやうに謠ふのがよいのである。

カタリ

或る一つの事柄を物語るのである。

いで其頃は元暦元年三月十八日の事なりしに云々

(八島)

そもくこのいさは河と申すは云々

(鶉飼)

總じてカタリは倦怠の感を起させぬやう語るのが肝要である。

祝詞

神道の祝詞に型取つたものである。大體スラくと曲をつけず、ザツにならぬやうに謠ふのである。

段讀物

讀物と云ふ時には、

木曾の願書

正尊の起證文

安宅の勸進帳

をさし、これを三讀物となへ、重き習ひものとなつてゐる。

段

一曲中の眼目たる一節であつて、夫れ自ら一段をなしてゐるのである。これは獨吟や仕舞に多く用ひられる。

文ノ段(野熊)……「甘泉殿のヨリ」  
「涙ながら書留む」マデ

玉の段(海人)……「其時人々力を添へ」ヨリ  
「海上に浮み出でたり」マデ

網ノ段(川櫻)……「あたら櫻のヨリ」  
「我櫻子ぞ戀しき」マデ

笹ノ段(萬百)……「實や世々毎のヨリ」  
「我子に逢ん爲也」マデ

笠ノ段(刈芦)……「あれ御覽ぜよ」ヨリ  
「心おもしろや」マデ

鶉ノ段(鶉飼)……「鶉籠をひらき」ヨリ  
「名殘惜しきを如何にせん」マデ

鐘ノ段(三井寺)……「かほどの聖人」ヨリ  
「鐘ぞさやけき」マデ

駒ノ段(小督)……「荒面白の折からやな」ヨリ  
「想夫戀なるぞ嬉しき」マデ



琴ノ段(威陽)……「さらば祕曲を奏すべし」ヨリ  
 有難かりける例かな「マデ」  
 結ノ段(國)……「其如く此君も」ヨリ  
 頼もしく思召れよ「マデ」  
 車ノ段(百)……「シテの南無阿彌陀佛」ヨリ「げにや  
 世々毎」の前の「南無阿彌陀佛」マデ  
 舟ノ段(平兼)……「前シテの舟中の條」

十番組

能會及び謠會に於いて、其日に舞ふ或は謠ふ曲の配合をよくして順序正しく組み立てるのが  
 番組である。

番組の編成に就いては、花傳書にしるされてゐる。正式の能會は六番であつて、

- 一 番 目 —— 神能(儀式の時には、この前に翁を入れることがある。)
- 二 番 目 —— 修羅
- 三 番 目 —— 鬘(女もの)
- 四 番 目 —— 鬼能

五番目 —— 義理を定むること

六番目 —— 祝言

これを分り易く云へば、初番は神祇、二番は合戦、三番は女、四番は見物を感じせしむるもの、五番は賑はしく人氣を引くもの、六番は君を祝ひ世を祝ふものである。左に一二の例をか  
 かげておく。

翁

- |         |         |
|---------|---------|
| (一) 高砂  | (一) 龍田  |
| (二) 田村  | (二) 經政  |
| (三) 羽衣  | (三) 井筒  |
| (四) 望月  | (四) 七騎落 |
| (五) 舟辨慶 | (五) 紅葉狩 |
| (六) 岩舟  |         |



この例の如く六番目の祝言を略する場合には、附祝言とて高砂の「千秋樂には民をなで」以下を謠ふことゝなつてゐる。尤も五番目の終の文句に「めでたけれ」とか、「久しけれ」とか云ふ祝言の文句があれば別に附祝言を用ひない。又追善供養の時などは融の「この光陰にさそはれて」以下を謠ふこともある。

かく六番が正式ではあるが、現在では夜能が多くなつたので、能二番狂言一番と云ふ式を採用するものが多い。これも時代の然らしむる所であるからして致し方ない。

能狂言は、能一番と一番の間に一番づゝはさんでゆくのであるからして、能五番の際には狂言は四番であるが、最近では、是をも數を少なくしてゆかふとする傾向がある。

### 十一 習事

習物は、傳授物で秘事に屬するものであるから、免許を得て稽古せねばならない。習ひものはたゞにシテ方にあるのみではなく、脇にも狂言にも囃子方にもあるのである。習物は五流の

間に多少の相違があつて、觀世流では習物でも、寶生流では平物であると云ふ曲がある。各流の習物を全部記述することは紙數がゆるさないから、觀世流だけの習物を左にしるしておく。

#### 觀世流

- 新習—仲光、 笛ノ卷、 楠露、 高野物狂、 菊慈童
- 九番習—藤戸、 鉢ノ木、 俊寛、 角田川、 景清、 當麻、 大原御幸、 定家
- 別習—神歌、 梅
- 三讀物—勸進帳、 起請文、 木曾願書
- 重習—碓、 望月、 鷺、 木賊、 石橋、 戀重荷、 卒都婆小町、 道成寺、 姨捨、 檜垣、 鸚鵡小町、 關寺小町
- 蘭曲—上の卷、 中の卷、 下の卷
- 三曲—初瀬六代、 東國下、 西國下

右の中九番習は能、謠共に弟子より誓書を徴して免狀を附與して教授するもので、九番一紙



に記して同時に免許するが、重習となると、一曲毎に弟子から誓書をとる。特に一年に一曲よりか傳へぬものである。其免狀の形式は大略

一定家 大原御幸 當麻  
 遊行柳 藤戸 景清  
 俊寛 鉢ノ木 角田川

右九番習能今般傳授候者也

何誰殿 年 月 日 何某

又重習の免狀は

一曲名 謠又は能

右重習能今般傳授候者也

何誰殿 年 月 日 何某

と云ふ形式である。免狀中の教授と傳授との區別は、直弟子なら教授と書き、門下の弟子(即ち孫弟子)ならば傳授と書く。

### 十二 蘭 曲

謠内外二百番の外に蘭曲と云ふものがある。謠一番中の妙處を抜き出し、或は別に一段きりの文句にして、節面白く緩急たくみに獨吟する曲である。昔は亂曲と書いたが、亂の字は「みだる」と讀むから縁起がわるいと云ふので蘭の字に改めたのである。謠としては、むづかしいもので、何れも習ひ事になつてゐる。曲目は流儀に依つて相違がある。紙數の關係上一々はかゝげない。

### 碁

サシ「石の白黒は夜晝の色。星目は九曜たり。目を三百六十目にわる事は、是一年の日の數なり。クセ「碁は敵手にあうて。手だてをかくさず。わづかに兩三目に。從來十九の道あり。あ



る時は四面をかこまれ。一聲をもとめ。ある時は。敵を責いとせめられ。戀しき時はうば玉の。よるの衣をかへしても。ねはまやすらん波枕。浮木の龜のおのづから。一目劫なりと。たてゝいかゞ有べき。されば生死の。ふたつの川をわたり。手の中に白道をあらはし。黒石はよしなや。今うつ五障三従の。女の身には遁れえぬ。業深きいしだて。心していざや打たうよ。ロンギ「源氏の巻や繪合の。勝負はしらねども。名を聞くも竹川の。ふしある石を桐壺。箒木の巻の碁の勝負。打ちしめりたる雨の夜に。手じなをいざや定めん。ゆふがほの宿に碁をうてば。たそかれどきもはやすぎぬ。そらめせし半菰を。おろすや中手なるらん。たゆまじき筋を尋ねし玉かづら。止長にいざやかかけうよ。石は白名は髭黒の大將の。まきばしら猶ぞたつ。下煙胸くゆる。火取の灰をうちかけられ。ねたやな戀の二道。梅がえ紅梅卷々の勾ふもかをるもわきかぬる。身を宇治山や霜雪の。しげきの下根春さむみ。もえいでかぬる早蕨の。手を見せぬるぞかなしき。いそいで碁を打たうよ。く。まづ一手二手三手。いざや目さんせん。四手五手六もく。ふしとか七打八打九うち。十市の里の碁の勝負。碁にそへて

打たうよ。碁は千聲萬聲。碁は百度千度萬手。空蟬は負けたり。軒端の萩の秋きぬと。かつ穂に出づる芦分船。おすこそ恨なりけれ。く。

### 十三 謠の心得

#### 謠と禮式

謠をうたふには古來式作法がある。之をみだすはゆるすべからざることである。近來、袴もはかず、扇子も持たずに謠ふ人があるが、不心得千萬な事である。謠ふ時には必らず袴をはかねばならない。(もつとも、時勢であるからして、椅子へ腰かけて謠ふと云ふやうなことも團體の服装の大略を左にしるしておく。

稽古能——稽古能 繼上下(上は肩衣、下は常の袴)が普通である。略して紋服と袴丈けの場合もある。

式能——式能 上下又は長上下に熨斗目を着るのが普通である。今では略して紋服の場合が多



い。翁は土烏帽子に素袍で、脇能がすむ迄この服装である。

袴能——役々のものが能装束をつけず、多くは紋服に袴で、地謠、囃子方、後見は纏上

下又は紋服に袴である。

囃子——シテ始め紋服に袴である。能の間に挟まれた時は上下又は纏上下を着ることが

ある。

素謠の場合は紋服に袴が普通である。

扇

謡曲家、能樂家にとつて扇は武士に太刀も同然である。武士が太刀をとると右へおく、謡曲家も扇を抜けば右へおく。これは太刀と同様悪魔を拂ふころからなのである。

扇は能、囃子、仕舞、素謠と用途を異にするに従ひ、五流夫れく構造も異なれば、模様も

異なるのである。能に用ひる扇は、

- 神扇
- 修羅扇
- 葛扇
- 狂女扇
- 男扇
- 鬼扇

- 尉ノ扇(又は墨繪扇)
- 常ノ扇
- 天女扇

など、種別があつて、これ等を使ふ能の種別もきまつてゐるのである。概して云へば其名稱の示す能なり、又は人物なりに使ふのである。模様にもいろくあるが、五流の代表的の模様は、

- 觀世流——觀世水
- 寶生流——五雲
- 喜多流——三雲

- 金春流——五星

扇をさす時——

扇のツマと要尻とへ左右の手を夫れくかけて取り上げ、袴の紐の全體へ通してさす。仕舞の場合には曲に依つて二本指すことがある。その時には一本文けは袴の紐の半分へかけて指すのである。

扇を抜く時——

左手を扇に添へ、右手で抜くのである。抜いたら居住居の右側へタテにおくのである。夫れ



からツマの方を左膝の先きにして、構へおきかへるのである。

扇のツマは天、要尻は地、陰陽から云へば、ツマは陽、要尻は陰に當るのである。

扇の構へ方——

扇の構へ方には、「眞」、「行」、「草」と三通りある。

眞の構へ——一旦扇をとり上げてイザ謠ふと云ふ時に、右手で要の所をおさへ、右膝の眞中邊から膝の内輪の方に斜に下して、ツマを板なり、疊の上へつけるのである。(寶生流では一旦扇を取り上げることをせず、イザ謠ふと云ふ時、要尻を右手で押へ上げて、夫れから前述の如くするのである。)

行の構へ——一旦扇をとり上げて地紙の下の所を右手で持ち、要尻を板なり、疊の上なりへつけ、縦に右の膝頭へあてるのである。寶生流丈けは、直ぐ地紙の下の所をつまみ上げて構へることになつてゐる。この構へは五流を通じて能の節に用ひてゐる。

草の構へ——扇をとり上げるなり、地紙の方を左の掌の上でうけ、要の少し上の方を右の手

で伏せてもち、膝の上へのせるのである。(觀世、寶生、金春では(申合せの時以外には)この構へを用ひない。金剛と喜多では能以外の時に用ひてゐる)。

謠ふ時の心得

謠曲は端唄など、違つて、聲は丹田から出さなければいけないのである。聲が丹田から出てこそ始めて力があるのである。口さきばかりでうたふことは大禁物である。謠ふ前にイキを充分に吸つて、下腹から聲が出るやうに工夫をこらさなければいけないのである。初心の人は口先きばかりで謠ひたがるからいけないのである。

開口に注意しなければならぬ。開口に注意せよとは發音に注意せよと云ふことであつて、發音のわるいと云ふことは大禁物である。文句が不明瞭になるのは、發音法がわるいからである。ヒをシとなまる癖の人もあるが、「ヒカリ」を「シカリ」と云つたのではぶちこわしである。發音に就いては常に人に聴いてもらつて、矯正してゆかなければならぬ。

聲がわるくとも悲觀することはないのであつて、怠らず鍛錬してゆけば立派な謠ひ聲になる



のである。聲の鍛鍊法には、

(一) 喉から血が出ると云ふ位まで聲をしぼりにしぼり抜く法。

(二) 喉をいたためぬ程度に謠つてゆく法。

とあるが、(一)の方法の方が有効である。勿論生理學的にみて(二)は合理的であるが、かう云ふ手ぬるい方法では本當の謠ひ聲には容易になれないのである。

調子に注意せねばならない。いくら立派な聲でも調子の合はぬ人(他人の調子につく)は、謠ひ手の資格なきものと云はねばならない。昔から「謠は口で謠はずに耳で謠へ」と言つてゐるが、これは人の調子を聞き分けなければ自分の聲を出してはならないと云ふことを意味してゐる。地謡の折りは地頭の發聲をきゝ夫れの調子に合はせなければいけない。音曲の調子は十二律と云つて

- 一越、 斷金、 平調、 勝絶、 下無、 雙調
- 鳧鐘、 黄鐘、 鸞鏡、 盤涉、 神仙、 上無

の十二に分けられてゐる。この中雙調、黄鐘、平調、盤涉、一越の五調子を根元調と云ふてゐる。その他の七調はこの間の間拍子である。謠曲家が古來重んずる五音(宮・商・角・徵・羽)をこれに引きあてると、

一越——宮(四季になぞらへると土用の調子)

平調——商(秋の調子)

雙調——角(春の調子)

黄鐘——徵(夏の調子)

盤涉——羽(冬の調子)

である。



切のある所の息は鼻なり、中途の息は口より」と云ふ教へがあるが、これを旨とすべきである。息繼は鼻であるのが原則である。

次ぎに大切なのは姿勢である。姿勢が正しくないと、醜いばかりでなく、充分な音聲と調子を出すことが出来ない。謠ふ時の構へ方は、

「膝頭を少し開いて兩膝を稍扇形にひろげ、足は拇指を重ね合せて二つ足の裏のくぼみに腰をしつかり据ゑ込み、胴を真直に伸し、腹を出して尻を後に引くやうにし、頸は真直であるが、顎を出さぬやうに引きつけるだけ僅か俯し心にする。目は凡そ一間許り先きを見る程の見當で、瞳をすゑ、氣を臍下丹田に落ちつけるのである。」

謠ふ時に、無暗に身體を動かしたり、首を振つたりすることは宜しくない。これは未熟者のすることである。又謠ふ時眼をつぶることもいけない。(謠ふ時の眼の保ち工合は半眼と云つて、(閉ぢもせず開きもせずと云ふのがいゝのである。)

平素鏡に向つて謠ひ、我が姿勢のわるい所を矯正することが必要である。

素謠も拍子はづれは聞きにくし

和洋音律對照表

略符	巨旋七聲	長音階符	十二律	短音階符	律旋七聲	略調符
—	宮變	C#	上無	D <sub>b</sub>	—	(ニ變)(ハ嬰)
1	—	C	神仙	C	羽嬰	ハ
7	羽	E	盤涉	B	羽	口
—	—	A#	鸞鏡	B <sub>b</sub>	—	(ロ變)(イ嬰)
6	徵	A	黃鐘	A	徵	イ
—	徵變	G#	鳧鐘	A <sub>b</sub>	—	(イ變)(ト嬰)
5	—	G	雙調	G	角	ト
—	角	F#	下無	G <sub>b</sub>	—	(ト變)(ハ嬰)
4	—	F	勝絶	F	商嬰	ヘ
3	商	F	平調	E	商	ホ
—	—	D#	斷金	E <sub>b</sub>	—	(ホ變)(ニ嬰)
2	宮	C	一越	D	宮	ニ

次ぎに息繼が大切である。息繼の下手の人の謠は下品に聞えていけない。大體に於いて「句



はづみすぐれば味ひが無し

の和歌の如く、拍子は謠の根本である。かうして、拍子を研究して之れに合ふやう謠はなければならぬ。拍子に合はぬ謠は坊主謠と云つて、最もいやしめられてゐる。常に師について地拍子の稽古をせねばならない。地拍子に關する書物も相當多く出版されてゐるが、書物を見ただけでは何んのやくにもたゝない。どうしても師に教へをうけねばならない。

### 十四 謠の修業

古歌に

舞二年太鼓三年笛五年

つとみ七年謠十年

と云ふのがある。謠は十年稽古せねばものにならない。この十年と云ふのは、玄人の稽古のこととて、一週に一度や二度の稽古をうけてゐたのでは、(素人稽古では)十年たつても、本當の謠になら

ないのである。けれど、素人は、慰みに稽古するのであるからして、謠らしくなれば夫れで目的の一部を達せられるのであるからして、十年くるしませずとも、三年も稽古すれば謠らしくなつてくるのである。謠の稽古を始めるに際して第一に注意することは、

良き師 につくと云ふことである。世間では、これから稽古するのであるから、師匠は誰れでもないゝと云ふ考へから、素人について習ふ人もあるが之れは宜しくない。最初わるい師匠についてわるい癖がつくと、終生その癖がぬけないからいけない、どうしても最初から、玄人の師匠につかなければいけない。

故寶生九郎翁は初學者の稽古に就いて

「私は書道には暗いが、最初手習をするにも先づ一字々の劃から順々に覚えて行かねば本統の字にならぬ様に、謠でも先づ初めは楷書風に一個々の節扱ひを正しく覚えなくてはなりません。最初から行書や草書を覺えたつて書けるものでない様に、謠でも草書などから初めたのでは節扱ひが本統に解るものではありません。先づ十番位迄の間は教へる方も嚴格



に毎回變らぬ様に形通りに謠つて聞かせ、教はる方も只管それに近づかうとしてかゝらねば駄目です。區劃正しくといふ事が先づ初學者の第一要件です。恚うして正しく教へられた節は一度覚えれば已う忘れるものではありません。お素人は愉しく叱言をいつて二三度直しでもすると已うすつかり嫌氣がさゝれる様ですが、その位の事で嫌になる様では到底此道の稽古は出来ません。」

と語られたが金言である。

聲のわるいと云ふこと、不器用と云ふことは、決して悲觀するに當らないのであつて、努力さへすれば大成するのである。古來幾多の實例があるのである。かうして、聲のわるい人、不器用な人も悲觀せず、努力と鍛鍊をしてゆけば必らず成功するのである。

猶左の教へを守ることが肝要である。

謠の上手下手は修行練磨にあれども、心得悪しければ不功者なり。心正しうして謠曲の大意を會得すれば、功速かにして早く上達するものなり。歌に

音曲はたゞ大竹の如くにて

直に清くて節すくなかれ

すべて功者の謠はする／＼と軽く、上には節なきやう聞ゆれど底に節こもり伸屈自在にて、そのさかひ耳に立たざるものなり。謠曲の大意といふは、

逢坂の關の清水に影見えて

今やひくらん望月の駒

逢坂の關の岩かど踏みならし

山たちいづる霧原の駒

この歌を以て會得すべし。先の歌は打聽何の節もなきやうなれど、數返吟するとも口にあたらず耳に立たずして感深く、後の歌は面白きやうなれども、數返吟すれば口にはくあたり、清水の歌には無下に劣りたるよし、音曲も清水の歌の如く安らかに丈高く、耳に立たぬやう有るべきなり。



謠曲の大意は、たゞ癖なく聞きよきやうに謠はんこと肝要なり。夫れ音聲は直なるものにして、曲節直にして少しも邪なければ、人には面白く聞かせんとて無理なる事をうたへば、節訛るが故文字訛りて義理を失し、耳立ちて聞きづらきものなり。漢土には平上去入の四聲あり、我朝は中國の清き水土の國なれば、言語清く、四聲を借らずして自ら之を分てり。たとへば垣・柿・昇・橋・端・箸は、文字に書くところ皆かき、はしなれども、いふところは其品を分つが如し。かゝる清淨の水土を受け得て生れながら、曲をなさんとて無理に訛る事、むげに口惜しき次第ならずや。たゞ安らかに癖なきやうに謠ふべし。諺に聲を忘れて曲を知れ、曲を忘れて拍子を知れと云へり。謠修練すれば聲はおのづから出づるものなり。聲をよく出ださんとて聲にのみ心を入るれば、しだるくなりて謠自由ならざるものなり。美聲なりとて、聲に心を入れ太く細く、或は頭を振り、浮沈おもしろきやうに謠ふ人あれども、耳に立つて聞き飽くものなり。老人の齒脱聲かかれたれども、たゞ一部の謠に心をこめてうたへば少しも聞き飽く事なく、いよく感に入るものなり。これをもて聲のみに拘はるべからざるを察すべし。

節にのみ心を入れ、師の癖に少しも違へじと謠へば、必ず謠すくみ固くなりて閉苦し。たとへば名ある墨跡を、薄き紙にて少しも違はざるやうに模寫にすると、用ひられざるが如し。人の生により木金土火水の聲かはりありて同じからず。甲高き聲の人、乙たる聲の人に合はさんと聲を乙らし、或は乙たる聲の人、甲高き調子に合はさんと甲て謠へば、聲合はずして却つて其人の謠のみ耳立ちて、閉苦しきものなり。

十五 去嫌とかざし

去り嫌いと、或る目出度き席で忌みはどかるべき謠の文句である。一通り心得ておかねばならないのである。

婚禮に——のく      さる      かへる      かへす      かさねて      かずく  
なほく      又      秋      返しを謠ふこと







「松はもとより常盤にて薪となるは梅櫻」

と云ふのが夫れであつて、原文は、

「松はもとより煙にて、薪となるもことわりや」

と云ふのであつた。

### 十六 節博士

謠の文句の傍に、謠のフシがしるしてある。その謠のフシを示した記號が節博士である。節博士の符號の形や名稱は流儀に依つて多少の差はあるが、其主なるものを左にしるしておく。

一 すぐ  
 一 つぐ  
 三 のみ  
 ㄣ 折りまはし

一 下  
 一 ふり  
 一 まはし  
 ㄣ 消しまはし

一 さゝげ  
 ㄣ 引き  
 ㄣ 引き  
 ㄣ 引き  
 一 本ゆり  
 一 一字下り  
 一 三字下り  
 一 色  
 イ 色  
 ウ 浮き  
 入 入り  
 クル 繰り(或流儀にてはシヲリと云ふ)  
 ノル 乗る  
 メラス 調子を呂音に取る印

ㄣ 持ち  
 ㄣ 振りびき  
 ㄣ 振りびき  
 ㄣ 半ゆり  
 一 二字下り  
 一 走り  
 ア 當り  
 ヲ 落し  
 ハル 張り  
 ノラズ 乗らず  
 クヅス 調子を下音に浮かす印



ヤ		ヤ
ヤヲ		ヤヲハ
ウ	文句の切目 <small>きれめ</small> にあるは打切の印	弓
禾	和の字の略、和吟 <small>わぎん</small> の印 <small>(但し流儀によりては強と柔との間を和吟といふ事もあり。)</small>	強の字の略、強吟 <small>つよぎん</small> の印

### 十七 はこびと緩急

謠うたひを生かして謠うたつてゆくには、はこびと緩急くわんきふを會得あてしなければならぬ。之は文字で云ひあらはせないのであつて、師しについて修業しゆげふし自ら工夫くわふせねば會得あて出来ないのである。さてはこびとは何かと云へば、「一句を組み立てる文字相互間さうごの速度的距離そくどの變化へんくわによる一種の技巧ぎかうである」と答へるより他はない。緩急くわんきふと云ふのは、「句と句との速度の差による技巧である。」これなくんば謠は死んでしまふのである。一句の内にも、一語のうちにも、一章一段しやうだんの内にも静しづめ

て謠うたふ所と、進めて謠うたふ所とある。之れを會得あてすることに努力りきふせねばならない。

#### 鞍馬天狗

月は鞍馬くらまの僧正そうじやうが……………緩めてシツカリ  
 谷にみち／＼峰を動かし……………之より急に進むこの跡位静めて謠うたふ  
 雨月うげつ

雨にてはなかりけり……………サラリと謠うたひ出す  
 雨をもきけとふく……………ト静める  
 此所は住吉すみよしの……………ト又引立て、謠うたふ  
 假寝かりねの夢も如何いかならん……………ト静める  
 よしととも旅枕たびまくら……………トさらりと出て  
 さらでも夢はよもあらじ……………ト静める  
 すべて一段一章だんしやうの謠うたの結尾けつびは必らず静しづめるのである。又舞まひの前、特に樂がくの前はグツト静める



のである。

十八 抑揚

抑揚は云ふ迄もなく聲の高低である。分り易く云へば、しまつた聲で謡ふのと、開いた聲で謡ふのとの對照である。これを會得するには、先づ聲を丹田から出すことが出来なければいけなう。

之を一曲に就いて申せば、概して前シテは抑へ、後ジテは張ることになつてゐる。之を高砂に例をとれば、前は老人で抑、後は神體であるから揚である。又役から云へば、シテは抑、ワキは揚と云ふことになる。クリ地は揚、クセは抑である。クセ上げ後は揚の心となり、ロンギから揚となる。(但しシテのロンギは抑、地は揚である)

隅田川の語り

(抑へて) 扱も (張つて) 去年三月十五日、や(抑)しかも今日にて候ひし(揚)都の者として年十二

三ばかりなる稚き者を、人商人奥へ連て下り候が(抑)彼人慣はぬ旅の疲にや(揚)路次より以て外に違例し、此川岸にひれ伏し候ひしを(抑)なんぼう(揚)世には不得心なる者の候ひけるぞ(抑)今を限と見えたる稚き人をば捨置き(揚)商人は奥へ下つて候(抑)さりとともくと思ひつれ共(揚)彼人唯弱りに弱り(抑)既に末期に及び候程に、餘りに痛はしく存じ(揚)故郷を尋ねて候へば(抑)今は何をか包む可き(揚)我は都北白川に、吉田の何某と申し人の(抑)唯一子にて候が、さる事ありて父には後れ參らせ(揚)母一人に添ひ奉り候ひしを、人商人我を誘ひ此國迄下り候——(下略)

十九 位

以上述べたハコビ、緩急、抑揚等の技巧の元締が(位)である。位とは、能なり謡なりの一曲の曲是である。如何なる能でも謡でも必らず(位)が定まつてゐるのであるからして、夫れを會得しなければならぬ。



概して云へば

老人物は壯年物より位が重い

女は男より重い

貴人は田夫野人より重い

とみることが出来る。又役に就いて云へば、シテはワキよりも位が重いのである。  
靜なるもの。

老松

白樂天

雨月

蟻通

卒都婆小町

鸚鵡小町

關寺小町

檜垣

姥捨

砧

遊行柳

定家

當麻

景清

大原御幸

實盛

頼政

靜にてしとやかなるもの。

江口

楊貴妃

井筒

夕顔

さらりとしたるもの。

田村

敦盛

巴

舍利

花月

狸々

謡曲のむづかしい味は、この(位)にあるのである。例へば三老女と唱へて此道の祕事とする曲の如きも、別に曲節から云へばむづかしいわけではないので、位をあらはすことがむづかしいのである。

### 二十 読み方と文句の軽重

謡の文句には一種一定の読み方がある。夫れは師について教へを乞へば自然と分ることであるから、こゝでは二三の例をあげておくにとゞめる。

かゝる時節をうかゞひて

(舟辨慶)

「ジセツヲ」と讀むべきを「ジセツト」と讀ましてゐる。

今日は淨陽の江に出でゝ

(狸々)



「コンニチハ」或は「ケフハ」と讀むべきを「コンニツタ」と讀ましめてゐる。

然るに勾踐は (舟辨慶)

「コーセンハ」と讀むべきを「コーセンナ」と讀ましてゐる。

そのたけ千尋の大蛇となつて (春日龍神)

「チヒロノ」と讀むべきを「チイロノ」と讀ましてゐる。

母

は「ハ、」と讀むべきを「ハワ」と讀ましてゐる。

さん候、これは日本の漁翁にて候。御身は唐の白樂天にてましますな (白樂天)

の日本は「ニホン」と讀まし、

これは漁翁なり、いかにあれなるは日本のものか (白樂天)

の日本は「ニツボン」と讀ましてゐる。

云ふ迄もなく謠曲は、うたひものであるからして、讀み方にも獨特のものゝあるは已むをえ

ない。その讀み方の中には古法こほふのまゝ、若しくは當時の俗語ぞくごを傳へたものもあり、又は音調おんてうを優いならしめんとて殊更ことさらに變へたものもあるのである。

謠うたひには所々に主眼しゅがんの文字がある。その主眼の文字は、叮嚀ていねいに心こころして謠うたふべきである。左に二三の例をしめしておく。

暮きりに數ある沓くわの音 (遊行柳)

胸むねの當りを刺し通し刺し通さるれば (藤戸)

松風村雨と召されしより (松風)

その鶉うつかひの亡者むしやにて候 (鶉飼)

互たがひひに手と手を取りかはせば、又またきえくとなりゆけば (角田川)

又文句の中に軽く謠うたふ所と重く謠うたふ所とある。これ又心せねばならない。

それは難波江なみわえ(軽く)これはまた、角田川すみだがはの東まで(重く)——角田川

あれなる里をばあまのゝ里と申して、かの海士人あまびとの住み給ひし在所ざいしょにて候(軽く)又是なる



島は(重く)——海士

二十一 拍子

拍子ひょうしに合はぬ謡は坊主謡ぼうずうたひと云つて輕蔑けいべつされる。随したがつて謡を稽古けいこする人は、或る程度迄謡へるやうになつたら、地拍子ちびやうしを稽古しなければならぬ。謡は拍子に合はなければいけないのであるが、と云ふて拍子にとらはれすぎてはいけない。そこに筆紙ひつしにあらはせぬむづかしさがある。一曲きょくの中、拍子ひょうしに合ふ部分と合はぬ部分とがある。一例として高砂たかさごをあげておく。

(一) ワキ次第わきしだいの「今を始める旅衣」……拍子に乗つて謡ふ。能のうの時には、地謡ちうたひが地取ちとりと云つて次第しだいを今一度かへ(返し文句もんくなしに第一句と第二句を)謡ふ。ワキ能のうの正式は、三遍さんべん返しと云つて、地取ちとり後ワキが今一度次第しだいを謡ふのである。

(二) ワキの名乗なりのりは拍子ひょうしに乗らない。即ち拍子に合はない場所である。すべて詞ことばは拍子に合はない。

(三) 「旅衣」以下の道行みちゆきは拍子ひょうしに乗つて謡ふ。

(四) ワキ能のうの一セイは眞まことの一聲いっせいである。一セイのハヤシを聞いてシテツレの一セイ謡うたひとなる。一セイ謡は拍子に乗つてはゐないが囃子はやしは引き續いて囃はやしてゆく。

(五) 「誰れをかも知る人にせん……」以下のサシは、拍子に合はないでよい。

(六) 下歌上歌さげうたあげうたは拍子にかゝつてゐる。

(七) ワキとの問答もんたふは、拍子にかゝらない。

(八) 初同しどう「四海波靜かいなみしづかにて」から拍子に乗つてゆく。

(九) 「夫れ草木心なしとは……」のクリ及び、「然れ共此松は……」以下のサシも拍子には合つてをらないのであるが、囃子はやしはアシラツてゆく。

(十) クセ及びロンギとつゞいて、「沖の方へ出でにけり」で前段ぜんだんを終る迄拍子にかゝつてゆくのである。

(十一) ワキの待謡まちうたひ「高砂たかさごやこの浦船うらふねを……」は拍子に乗つてゆく。この待謡まちうたひがすむ頃から、



太鼓が入つて、夫れから三拍子揃つて出羽を囃す。その間にシテが出て、之れが終ると、シテの「我れみても久しくなりぬ……」の和歌となる。この和歌謡は拍子に合つてゐないが、太鼓は相變らずアシラツてゆく。

(十二) 神舞となり、舞上げの「有難の影向や」以下切りの文句は拍子に乗つてゆくのである。

以上は一例であるが、大體これに依つて、拍子に合ふ部分と合はぬ部分は分ることと思ふ。更らに、分り易く云ふと、拍子に合ふ部分は、

次第、道行、下歌、上歌、初同、ロンギ、曲、切(すべて地は拍子に合ふ)

拍子に合はぬ部分。

詞、一セイ、サシ、クドキ、クリ、イロエ地、和歌、

拍子とノリ

拍子とは、文句を寸尺の規矩にはめて謡つてゆくことであるが、その規矩の一つ／＼を當り

と云つて、全く雨垂のやうに謡ふのを雨垂拍子と云ふのである。けれどもこれは原理であつて、實際の謡は全く雨垂とはせず、多少の斟酌と緩急とをつけて、且拍子に外れぬやうに謡つてゆくのである。

謡の拍子は八ツ拍子が本である。即ち謡の文句七五、十二字の一字に雨垂拍子八つを割りあてたものが夫れである。

- 1 が
- 2 アー拍一第
- 3 は
- 4 らー拍二第
- 5 お
- 6 オー拍三第
- 7 も
- 8 てー拍六第
- 9 を
- 10 オー拍五第
- 11 す
- 12 ぎー拍六第
- 13 ゆ
- 14 ウー拍七第
- 15 け
- 16 ばー拍八第

以上は原則ではあるが、これでは謡がダラリとして、緩急に乏しい。そこで名人連がいろ／＼工夫して、上半分を三ツ割、下半分を二ツ割と云ふ風にしたのである。この八ツ拍子を本地と云ひ、本地が拍子に合ふ部分の文句の大部分を占めてゐるのである。なほ文句の長短や節の都



合で、變態が生じてゐる。

片地(一ツ地)——拍子六つを一クサリとしたもの

トリ——拍子四つを一クサリとしたもの

ヲクリ——拍子當り二つを一クサリとしたもの

が夫れである。

拍子の規矩の乗り工合には大別して三つある。

大ノリ——一字々々をタツプリ引いて謠つてゆくもの。太鼓の入つてゐる所は殆んど皆この大ノリである。

平ノリ——大ノリの如く一字々々をタツプリゆとりをつけず、凡そ三字目々々丈けに持ち合ひをつけてゆく謠ひ方の所が平ノリで、次第道行、下歌、上歌、初同、クセ、ロンギ等太鼓のない所にある拍子の地の大部分を占めてをる。

中ノリ——(修羅ノリ)——殆んど持ち合のないやうに文字々々の読み重なつて謠ひゆかれ

るノリ方を、中ノリと云ふのである。

以上述べた「平ノリ、中ノリ、大ノリ」の三種のノリと、之れに對する本地、片地、トリ、オクリ等拍子の變化、及び各ノリと各拍子とに於ける各種の間(半聲の間、本間、ヤノ間、ヤアの間、ヤヲの間、ヤヲハの間)の關係を充分に研究してゆかなければならない。之れを充分に會得しなければ、謠の拍子に通ずることは出來ないのである。

能の樂器

大鼓——左の手に持ち腰にかまへて、右の手を大きく擴げて打つ。

小鼓——右の肩にあげ、左の手で調の緒を持ち、しめをゆるめしめつゝ打つ。

太鼓——臺にかけ下におき、兩撥で打つ。

笛——拍子の間にアシラヒ吹きて、命令者となるのである。又謠の文句なき時に、笛が地をなすことがある。

大小鼓、太鼓、笛、にも各々流儀がある。



笛——一噌流、藤田流、春日流、森田流

小鼓——幸流、幸清次郎流、大倉流

大鼓——葛野流、高安流、大倉流、石井流、幸流、寶生流練三郎派

太鼓——觀世流、金春流

一調一管

大小鼓と太鼓とは一調と云ふて、他の拍子と合はさず單獨で謠に合せて打つてゆくことがある。一調の場合には、謠が従たるものである。笛丈け吹いて謠に合せてゆく場合がある。これを一管と云ふのである。何れもこの道では重き習ひとせられてゐる。

大鼓の一調

八島の切、笠ノ段、勸進帳

小鼓の一調

玉の段、松虫、放下僧

太鼓の一調

春日龍神、杜若、金札

笛の一管

玉葛、江口

以上は一例である。

一調一管の場合々々は、囃子が主であるからして、坐する時には、囃子方が正面に向き、謠人は斜めに目附柱の方へ向くのである。



### 第二篇 能

#### 一 舞臺

能舞臺は普通獨立して建てられるもので、これに附屬するものは、橋掛り並びに樂屋丈けであり、見物席の如きは、棟が別になつてゐるのが正式である。此點は劇場とちがふ點である。一つの能樂堂と云ふ建築物の中に、半分は舞臺、半分は見物席と劃されてゐるのである。云はば、見物席と舞臺とをひつくるめてこれを能樂堂と云ふのである。

サテ能舞臺と云ふ場合には、樂屋及び橋掛りが含まれてゐるのである。舞臺の正式の寸法は三間四方である。舞臺の下へはカメをいけて、音響上便利をあたへてゐる。これにも古來作法がある。

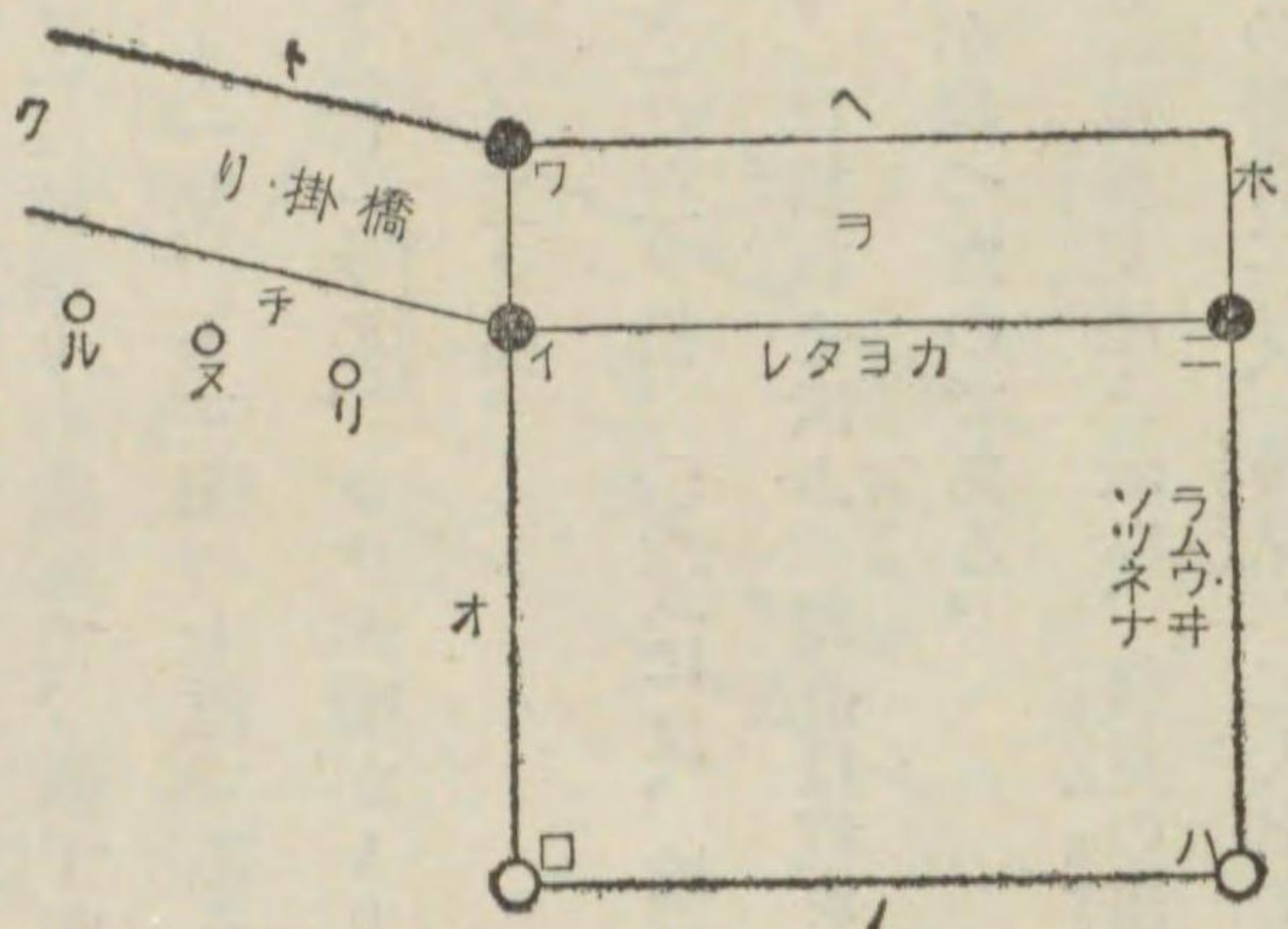
(イ)の柱をシテ柱と云ひ、シテのおもに所作をなす起點とも終點ともなるのである。

(ロ)の柱は目附柱と唱へて、シテの所作をなす時の標準となるのである。或は目附柱とも云ふ。

(ハ)の柱は大臣柱又はワキ柱と云ひ、ワキが常に着席する所である。

(ニ)の柱は笛柱と云ひ、笛師の着席する所である。道成寺の鐘を釣る綱はこの柱で控へおくのである。

(ホ)は切戸と唱へて、地謡後見などの常に出入する所である。一名忘れ口、臆病口とも云ひ、一名狂言柱とも云ふ。夫れはこの柱よりに、橋がりの一端に間の語り(中入の時に出る)狂言師がひかへてゐるからである。



(ヘ)は舞臺の後ろを仕切つた板で之れを鏡板と云ふ。松の繪を描くのが正式である。右の方



笛方の側の側面のはめをも鏡板と云ひ、こゝへは竹の繪を描く。

(ト)は裏板とも羽目とも云ひ、この板のうしろは樂屋である。

(チ)は橋掛りの前面で、欄干がある。橋がりの寸法は、二間、三間、五間、七間、九間、

十一間、十三間の七種である。通例五間、三間が多い。

(リ)は一ノ松、シテが橋がりで謡ひ出すのに、多く之を目あてにする。

(ヌ)は二ノ松。

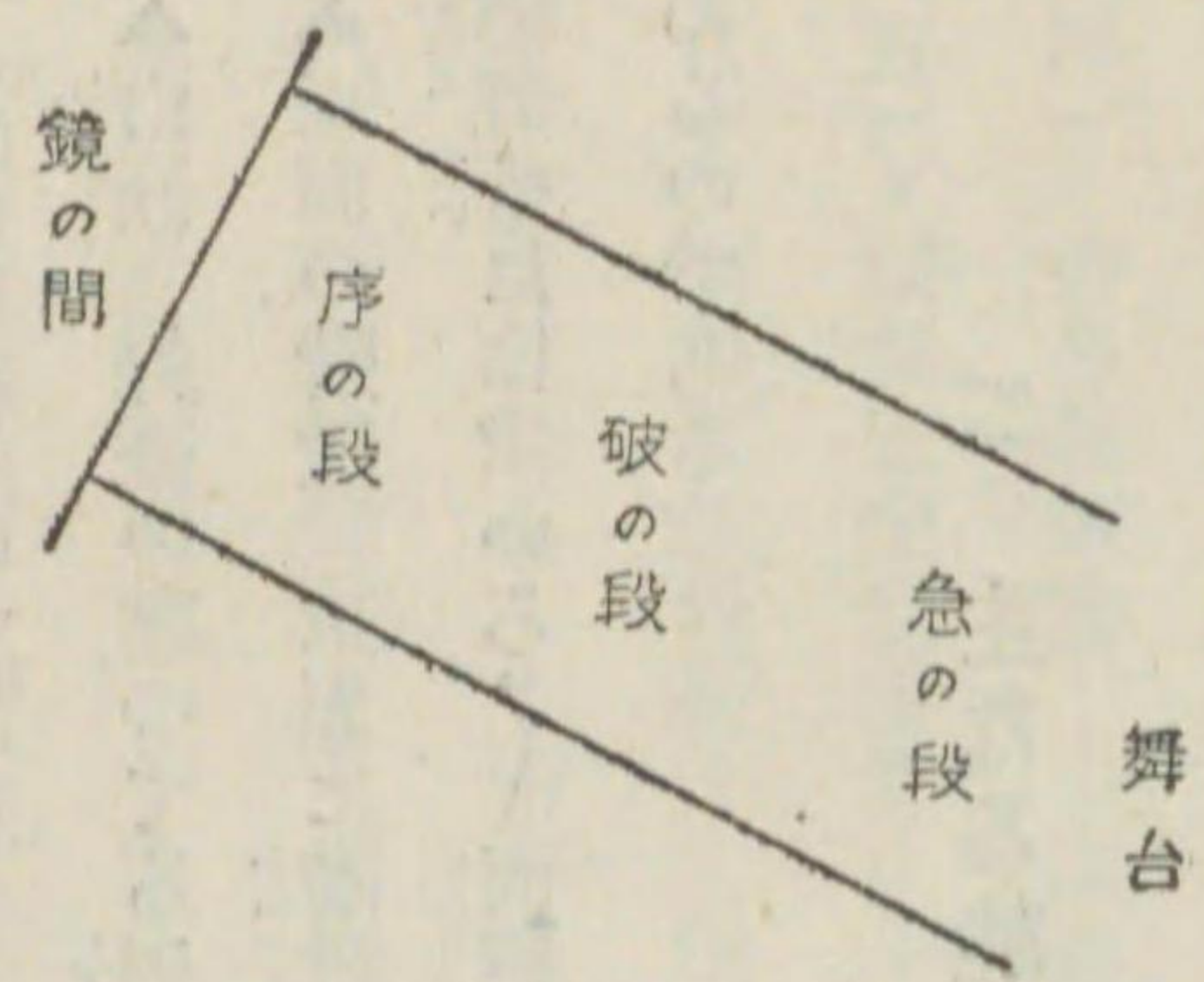
(ル)は三ノ松。(正式には、橋掛の後ろの土間にも二本松をうゑなければならぬ。)

(ヲ)は横板と云ふ。舞臺は板をタテにおきたるに反し、こゝは板を横におくので、この名前が起つたのである。

(ワ)は後見座と云ひ、後見の着席する所である。其左にある柱を狂言柱と云ふのである。能の場合には、後見が二人出て、この後見座にすわるのである。

(カ) 笛の席。

(ヨ) 小鼓の席。  
(タ) 大鼓の席。



(レ) 大鼓の席。

(ソツネナラムウキ) 地謡の席である。

(ノ) 正面。

(ヲ) ワキを正面にみる所であるからして、ワキ正面と云ふ。

(ク) 上幕で、この幕の中を鏡の間と云ひ、夫れから樂屋となるのである。上幕のあげさげは、中々むづかしいので、

未熟のものには、完全に職務が全う出来ないものである。上

幕の所を幕口と云ひ、幕口の奥の一ト間が鏡の間で、こゝ

に鏡があつて、諸役者が自分の姿を見てなをすなりなんなりするのである。鏡の間、樂屋すべて板敷である。樂屋内も役柄によつて着席する所がきまつてゐて、秩序整然たるもの



である。

▲奉行窓 鏡の間から舞臺を見るやうに窓がついてゐるが、之を奉行窓、物見窓とも云ひ、故實があるのである。

▲白洲 舞臺の建つてゐる周圍に「小石」をしき、これらを一帶に白洲と唱へてゐる。

▲正面の階段 正面に階段がついてゐるが、今では之れを用ひない。

猶舞臺には、いろく面倒な故實があるのである。例へば橋がりの如きも、序破急に分れてゐるのである。

## 二 主なる能舞臺

東京に於ける主なる能舞臺を左にしるしておく。

(一) 恩賜能樂堂——麴町區三年町華族會館内 (電話銀座二四〇七)

この舞臺は平素は用ひない。

(二) 九段能樂堂——九段靖國神社境内

(三) 寶生會能樂堂——本郷區元町一ノ一 (電話小石川七四六九)

これは設備が最も完全してゐる。

(四) 喜多會舞臺——四谷區愛住町六七 (電話四谷一六八〇)

(五) 觀世宗家能樂堂——牛込區新小川町二ノ十 (電話牛込三一六)

(六) 細川家能舞臺——麴町區富士見町五ノ七細川家邸内 (電話九段二九一一)

(七) 染井舞臺——市外巢鴨駒込染井松平伯邸内 (電話小石川七八五)

(八) 橋岡能舞臺——赤坂區榎坂町四 (電話青山二八三七)

(九) 赤坂能樂堂——赤坂區表町赤坂御所前 (電話青山四六一五)

もと金剛宗家の舞臺であつたが、今では梅若流の専用舞臺となつてゐる。

(十) 高輪能樂堂——市外北品川一本木三四三で、梅若萬三郎氏の舞臺である。(電話高輪四七六八)



(十一) 厩橋能樂堂——淺草區南元町二九にあり、梅若六郎氏の舞臺である。(電話淺草三三九〇)

(十二) 觀世能舞臺——下谷區西町三で觀世鐵之丞氏の舞臺である。(電話下谷五九六一)  
その他 谷村氏、山本氏等の舞臺もあるが、之れらは小規模である。  
能樂を見にゆきたいが、様子が知れないからと云つて尻込みしてゐる人も可成あるやうだが、夫れは無意味のことである。能樂は現在興行と云ふ形式をとつてはいないが、臨時會員として會費(事實上觀覽料)を拂へば入場して觀覽することが出来るのである。

### 三 役 者

役者は、

一、シテ  
二、シテヅレ

一、ワキ  
四、ワキヅレ

### 五、子方

である。是等のうち、シテ、ワキ、狂言は各々分業して専門をなし、互ひに相犯し相助くることをしない。一番の能を演ずるには、この他囃子方が必要である。又「物着」と云ふて樂屋内で、シテ方に装束をつけることを専門としてゐるものもある。

### 六、アヒ(狂言師がつとめる)

シテは太夫とも云ひ、其一番の主人公である。千手、三井寺、清經、通小町、大原御幸の如く、一番の内一人一體のものもある。又一人なれども中入して装束をきかへ、二體となるものもある。(高砂、田村の如く) 又前と後とで別人をあらはすものもある。(鶉飼、藤戸、舟辨慶の如く)

### シテ方

何れにせよ中入前のシテを前シテ、中入後のシテを後ジテと云ふのである。一番を通じてシテが面をつけないで演ずるものを「素面」とも云ふのである。

シテたるべき資格のあるものは、徳川時代に於いては、觀世、寶生、金春、金剛、喜多の諸



太夫であつた。今ではこれら五流の中で、シテ方たるべき資格のあるものは勤めることが出来るのである。(梅若は現在一流をたてゝゐるが、正式に五流の仲間入りが出来ないでゐる。)

シテヅレ

シテヅレは、シテに附屬したる助役である。シテを主とすれば、シテヅレは従たる役である。シテヅレにも軽重があつて、

- (一) シテと殆んど同資格を有するもの。
- (二) 一役として尊重せられるもの。
- (三) 従者となり、立ち並ぶ人数に(俗にトモ及び立衆)加はる程度のものと區分せられる。

兩ジテと呼ばれて、シテと同格と迄見られるもの

- 蟬丸の………蟬丸
- 夜討會我の………十郎
- 小袖會我の………五郎
- 松風の………村雨

砧の………夕霧  
一役として尊重せられるもの

千手の………重衡

- 高砂の………姥
- 大原御幸の………法皇、内侍
- 善界の………太郎坊
- いはゆるトモなるもの

- 清經の………女
- 俊寛の………康頼

- 橋辨慶の………太刀持
- いはゆる太刀衆なるもの

土蜘蛛の………太刀持

- 安宅の………ツレ山伏
- 七騎落の………ツレ武士

攝待の………ツレ山伏

子方

名のしめすが如く、子供のする役である。これに三種ある。



(一) 子供として作りたる役なれに用ふるもの

百萬の……子

櫻川の……子

角田川の……梅若丸

唐船の……日本子

満仲の……美女丸、幸壽

(二) 其物を神聖ならしめんが爲めに、或はあはれ深からしめんが爲めに殊更らに子供なら

しめるもの

花筐の……王

草子洗の……王

安宅の……判官

(三) 大人にてもすれど、或る時は子供なるが愛らしとて用ふるもの

鶴龜の……鶴と龜

竹生島の……天女

ワキ

ワキはシテの相手役で、シテを主人公とすれば、ワキは賓客たるの地位に立つのである。ワ

キはシテ方とは別箇のもので、之れに

寶生流 (俗に脇寶生) —— 家元寶生新

高安流 —— 家元代理 西村弘敬

福王流 —— 家元代理 野島信

と流儀がある。

ワキにも、田村、兼平、頼政の如く普通のワキと、石橋、三井寺、鉢ノ木の如く尊重すべきワキとある。何れにせよ、ワキ方は、シテの藝を生かすべくつとめてゆくのである。シテの藝が六丈けあれば、ワキは夫れ以下の力を出して、シテを生かしてゆかねばならない立場にあるのである。随つて餘程の實力がなければ、名人とは云はれない。現代に於いては寶生新氏は第一流の大家で、今後もこれ丈けの名人はあらはれまいと云はれてゐる。中にはワキのない能もある。橋辨慶、小袖會我、夜討會我の如きはこの例である。ワキを曲中の人物に依つて分類すれば、



風折烏帽子給狩衣の姿なるもの。謂はゆる大臣脇。

高砂……………阿蘇の宮の神主友成

難波……………當今に仕へ奉る臣下

老松……………梅津のなにかし

養老……………雄略天皇に仕へ奉る臣下

竹生島……………延喜の聖代に仕へ奉る臣下

志賀……………當今に仕へ奉る臣下

玉井……………彦火々出見尊

加茂……………室の明神に仕へ奉る臣下

吳服……………當今に仕へ奉る臣下

氷室……………龜山院に仕へ奉る臣下

右近……………鹿島の神職何がし

白髭……………當今に仕へ奉る臣下

弓八幡……………後宇多院に仕へ奉る臣下

法衣帽子の僧體なるもの。謂はゆる僧脇。

田村……………東國方より出でたる僧

江口……………諸國一見の僧

鶺鴒……………安房の清澄より出でたる僧

義平……………木曾の山家より出でたる僧

卒都婆小町……………高野山より出でたる僧

頼政……………諸國一見の僧

井筒……………諸國一見の僧

三井寺……………園城寺の住僧

玉葛……………諸國一見の僧

融……………東國方より出でたる僧

采女……………諸國一見の僧

通小町……………八瀬の山里に一夏を送る僧

朝長……………嵯峨清涼寺より出でたる僧

梅枝……………身延山より出でたる沙門

鉢木……………一所不住の僧 (最明寺)

遊行柳……………諸國遊行の聖

三伏……………玄賓と申す沙門

兜巾篠懸の山伏姿なるもの。謂はゆる山伏脇。

葛城……………出羽の羽黒山より出でたる山伏

黒塚……………那智の東光坊の阿闍梨

葵上……………横川の小型

舟辨慶……………西塔の傍に住む武藏坊辨慶

船橋……………三熊野より出でたる客僧

攝待……………武藏坊辨慶

飛雲……………三熊野の山伏

素袍姿なるもの。謂はゆる男脇。



雲林院……蘆屋の里に公光と申す者

蘆刈……都の御方に仕へ申す者

景清……里人

角田川……角田川の渡守

俊寛……相國に仕へ申す者

梨子打烏帽子直垂なるもの。

春榮……高橋権頭

千手……狩野介致望

藤戸……佐々木四郎高綱

安宅……富樫のながし

盛久……土屋殿

この他翁烏帽子單狩衣の神職姿、唐冠法被半切の唐人姿のもの、鉢巻の側次大口と云ふ姿のものもある。ワキは決して面をつかふことなく、又女體なるは一人もないのである。

ア ヒ

アヒは狂言方の役であつて、これに二種ある。

(一) アシラヒのアヒ

班女……野上の宿の長

竹雪……繼母

道成寺……能力

安宅……太刀持

唐船……舟子

(二) シテの中入したる間を中絶せざらしめんとて出るもの。

カタリアヒと云つて、高砂、田村、頼政の如く、其土地について物語るもの。又早打をなして急を告ぐるもの(鉢ノ木、羅生門、土蜘蛛)、末社として神體など出だし祝ひ舞ふもの(加茂、養老、嵐山)などいろいろの種類がある。又カタリアヒ、早打、末社などにすべきを他の趣向に變へたものもある。例へば

夜討會我……王藤内

橋辨慶……弦師

嵐山の……猿聲

加茂の……御田

アヒの役の中でも、道成寺、石橋、望月の如く一役として番組に記載されるものもある。(狂言の部アヒを参照すること)



大	谷	黑	殺	一	西	羽	大	枕	吉	道	逆
會	行	塚	生	角	行	衣	蛇	慈	野	明	鉢
		石	石	仙	櫻			童	天	寺	
				人					人		
鐘	舍	昭	天	女	小	葛	狸	菊	松	咸	寢
				郎				慈	尾	陽	覺
尙	利	君	鼓	花	鹽	城	々	童	尾	宮	
熊	野	紅	山	船	三	六	實	三	伏	皇	江
		葉									島
坂	守	狩	姥	橋	輪	浦	盛	笑	見	帝	
項	善	土	藤	錦	龍	杜	通	御	浦	小	輪
								裳	島	鍛	藏
羽	界	蜘蛛	榮	木	田	若	盛	濯	島	冶	
國	車	鶉	葵	鶴	邯	誓	朝	葛	豐	合	大
						願		城			社
栖	僧	飼	上		鄆	寺	長	天	千	甫	
								狗			

四 噺子方

噺子方は、能一番毎に、樂屋から橋ガ、リの羽目板の方を通つて舞臺に出で並ぶのである。笛、小鼓、大鼓、太鼓と云ふ順序に並ぶのである。小鼓と大鼓とは床几にかゝり、他は舞臺の板の上に坐するのである。太鼓は、ある能とない能とがある。

太鼓のある(はいる)曲は、

右	西	加	東	白	高
近	王	茂	方	樂	砂
	母		朔	天	
氷	室	嵐	鶴	放	弓
				生	八
室	君	山	龜	川	幡
玉	金	竹	富	佐	淡
		生	士	保	路
井	札	島	山	山	
久	志	岩	鵜	源	養
世				太	老
戸	賀	舟	祭	夫	
和	代	吳	難	白	老
布		服		髭	松
刈	主		波		



春日龍神	船辨慶	當麻海人	融
初雪	雲林院	唐船	第六天
張良	烏帽子折	正尊	羅生門
龍虎	松山鏡	壇風	藍染川
藤	陀羅尼落葉	胡蝶	草薙
護法	求塚	雷電	千引
鷄龍田	須磨源氏	調伏曾我	飛雲
碓潜	關原與市	鱗形	通
姥捨	藤戸	遊行柳	綾波
望月	石橋	こひの重荷	礎
			鷺

翁つき高砂のときには、囃子方は、同一の人で勤めるのである。狂言の中にも、アシラヒと唱へて拍子を要するものがある。末廣、張蛸、石神、金岡の類である。この場合には、前の能

の囃子方がそのまま舞臺に居残つてアシラウのである。

### 五 作 物

舞臺に持ち出して、据ゑおく道具立のことを作物と云ふのである。能では芝居とちがつて、背景に重きをおかない。随つて作り物も極めて簡單である。

山……竹でつくり引廻しをかける。野守、氷室の如きは上に柴をさす。角田川、遊行柳の如きは柳をさす。紅葉狩の如きは紅葉をさす。何れにせよ極めて簡單なものである。

宮……社殿の形に作つたもので、竹生島、和布刈の類に使ふ。

車……牛車に擬して作つたもので、轆あり且左右の輪がある。熊野、右近などに使ふ。

舟……舟辨慶、兼平、竹生島などに使ふ。何れも構造簡單である。

以上二三の例で分るやうに、能樂で使ふ作り物は極めて簡單無雜作なものであるが、ソコに云ふに云へぬ味ひがあるのである。



### 六 小道具

役者の手にとり用ふるものを小道具と云ふのである。小道具の種類は相當に多いが、(約六十種)二三の例をあげておく。これに依つて小道具の性質を推察することが出来るであらう。

扇……末廣と中啓との別がある。素袍上下着たる時には末廣を、其他はすべて中啓を使ふ。

中啓にも、翁扇、神扇、修羅扇、男扇、僧扇、女扇と種類がある。

さらへ……松葉搔で高砂などに使ふ。

笹……狂女の手を持つ竹の杖であつて、持笹とも狂笹とも云ふのである。

杖……竹でつくる。老人杖と盲目杖とがあり、其つき方がちがふのである。握りの撞木になつてゐるのを鹿背杖と云ふのである。

田子……水桶に長い紐をつけて竹で荷なふやうにしたもの。融、絃上などに使ふ。

葛桶……腰掛につかふ丸い箱である。床几とも云ふのである。

作り物と同じく小道具にもむづかしいしきたりがあるのである。

### 七 面

面は「メン」と讀んではいけない。「オモテ」と讀むべきである。面は、能樂家の魂がやどると云はれ、神聖犯すべからざるものである。面はシテ及びシテヅレのみがけるので、ワキ師は絶対にかけない。狂言でも曲に依つて面をかけることがあるが、之れは狂言面と云ふて能面とはちがふのである。能面の種類も頗る多く、百數十種からある。中には極めて稀なるものもあるし、或る一流の或る一曲に限られたるものもある。又同一の面でも、流儀に依つて用途を異にすることがある。

通例面は

尉面、男面、女面、神佛面、鬼畜面

と云ふ工合に分類し、各々に數々の種類があるのである。



主なものに就いて説明しておく。

白式尉……或は白色ともかき、所謂翁面である。翁に使ふのである。黒式と共に下顎が分離

してとちつけられてゐるのが他に類のない特色である。

黒式……三番叟に使ふ面で眞黒である。元來面の性質には陽と陰とがあり、白式黒式は陽の

面である。陽の面は顔につけた時下むきかげんにしてはいけない。深井の面の如きは陰の

面で、これは少しく下むきかげんにしないと凄味が出ない。

邯鄲男……少しく眉をよせて憂ひを含んでゐるが、極めて人間らしい容貌をしてゐる。神舞

物は繪馬を除いて皆此面を使ふのである。神舞物の公式は前ジテは小尉、後ジテは邯鄲男

である。

中 將……之れも少しく憂ひを含んでゐるが、上品で殿上人と云ふカタチである。清經、通

盛などの公達ものゝ後、融、小鹽等公卿ものゝ後に使ふ。田村、八島、兼平等武將ものに

使ふ面に平太と云ふのがある。平太と同種類のものに今若と云ふのがある。觀世、寶生で

は使ふが、下がゝりでは使はない。

童子と慈童……何れも可愛らしい面で、觀世では多く慈童を、他流では童子を使ふ。田村、

小鍛冶、大江山、岩船などの前、枕慈童などに使ふ。

喝食……童子の少し年とつたと云ふやうな面で、前髪を切下げた所が描いてある。自然居士

で使ふのが大喝食、花月で使ふのが小喝食である。

瘦男……肌色も頗る陰氣で、頬のこけた貧しさうな顔である。藤戸、善知鳥、阿漕の後と通

小町に使ふ。

小面……廣く用ひられる若い女面で、東北、江口、誓願寺などに使ふ。この面は用途が非常

にひろい。

増……小面よりも年増で、美しいには美しいが、どことなく凄味がある。寶生では三番目物

に小面と共に使ふが他流では本三番目ものにはあまり使はないで、加茂、玉井、右近、吳

服などに使ふ。



孫次郎……極めて艶な面で品位には乏しい。熊野、杜若、松風などに使ふ。觀世流では使は

ない。これと類似の面に「萬媚」と云ふのがある。

深井……物思はしげな面で、小面の類より年がふけてゐる。觀世では本三番目にも使ふが、

寶生では角田川、三井寺、其他狂女ものに使ふ。深井よりも遙か白く凄味のかゝつてゐる

のが「曲見」と云ふ面で、觀世では使はないが他流では使ふ。

泥眼……眼の中に銀泥が塗つてあつて、頗る凄い女である。葵上、鐵輪の前、海士の後に使

ふ。

大飛出……眼の大きくて眞圓な、大きく口を開いた面で、朱塗のと金泥のとがある。この種

類に小飛出と云ふのががある。大飛出は、加茂、嵐山、國栖の後に使ふ。

大癡見……恐ろしく大きな面で、大きな口をムツと結んだ所が特徴である。これと類似のも

のに小癡見と云ふのががある。大癡見は是界、鞍馬天狗、大會、車僧等天狗ものゝ後に使ふ。

般若……これは一般に知られてゐるから説明する迄もあるまいと思ふ。黒塚、葵上、道成寺

などに使ふ。

以上は一例であつて、面の種類と用途をつくすと云ふことは到底紙數がゆるさない。能面に就いては拙著「能面史講話」「能面史話」を参照して頂きたい。能面にも、古作と新作とがあり、其メキ、(目利)は中々にむづかしい。猶参考迄に面紐の色をあげておく。

尉——白、茶、

中將、邯鄲男、 平太、 怪士の類——淺黄

女面——紫

飛出、 癡見、 獅子、 怪士の類——紺色

### 八 装 束

能装束と云ふと、衣裳丈けのやうに思ふ人もあらふが、我々が装束と云ふ場合には、烏帽子、天冠の如く頭につけるもの、袴の類等を總稱するのである。これらの一々に就いて記するこ



とは、到底紙数がゆるさないのであるから、主なるものに就いてのみ説明をしてゆくこととする。

冠り物にも、烏帽子、冠、頭巾、帽子等の種類があり、其各種は更らに數多に分れてゐるのである。一口に烏帽子と云ふが、これにも翁烏帽子、小立烏帽子、風折烏帽子、大臣烏帽子、梨子打烏帽子、靜烏帽子、前折烏帽子、侍烏帽子、小結烏帽子と種類が多いのである。翁烏帽子は、黒色の立烏帽子で、被ると云ふよりはむしろ頭上に戴くのであつて、能樂中最も神聖なる式として行はるゝ翁にのみ使用するのである。

頭かしら(房々とした永いにも黒頭、赤頭、白頭と種類がある。この中、眞黒な毛でつくられた黒頭が一番用途がひろい。赤頭は嵐山、國栖などのやうに飛出と云ふ面をつける神體の後ジテに用ゐる。(この他にも)白頭は用途がせまいが、白頭と云ふ小書がつくと、曲の位が重くなる。小書なしで之れを用ゐるのは、綾鼓、戀重荷の後、龍虎の虎と寶生流の山姥ぐらゐるものである。猶冠、帽子にもいろ／＼種類がある。垂たれ(頭に比し著しく)鬘かつら(葛の字を用ゐ、狹義には女物)にも

種類が多い。

装束の主體をなすものは衣類であるが、然し衣類と云つても中々種類が多いのであつて、能装束を研究すれば日本の服飾史は大半了解出来ることになるのである。通例廣袖物、小袖物、袴、上下物、附屬物の五つに分けて説明することゝなつてゐる。

水衣……高砂の前ジテ又は松風のシテツレなどの上に着る衣をいふのである。紺水衣、白水衣、紫水衣、縞水衣等の種類がある。

狩衣……元來は狩獵の服であるが後に官服となつた。高砂のワキ又は後ジテなどの上に着る衣をいふ。單なると袷なるとの別がある。

長絹……羽衣のシテなどの上に着る衣をいふのである。

舞絹……富士太鼓のシテなどの上に着る衣をいふのである。

法被……八島の後ジテなどの上に着る衣をいふのである。

側次……鉢木のシテなどの上に着るものをいふ。袖なき衣である。形は法被の袖のないも



のである。

直垂……安宅のワキなどの着るものを云ふ。袴も共に用ふるを直垂上下といひ、上ばかり用ふるを掛直垂といふのである。

素袍……鉢木の前ジテなどの着るものを云ふ。袴も共に用ふるを素袍上下といひ。上ばかり用ふるを掛素袍といふ。子方には袴ばかり用ふるもある。

唐織……熊野などの着る衣をいふ。若き女には紅色の交りたるを用ひ、年よりたるには紅色なきを用ふ。之を色有り、色無しと呼ぶのである。

厚板……望月の後ジテなどの上に着る衣をいふのである。

箔……女もの、着附に用ふ。縫箔摺箔の別がある。

白練……翁などの着附に使ふ。

熨斗目……僧の着附などに使ふ。

くわら……袈裟なり。盛久などに使ふ。

篠懸……山伏の胸に掛くるもの。饅頭の如きもの附きたり。

以上は衣裳。

大口……芦刈、鉢木(後)のシテなどの着る袴。これに白地と色地との別がある。

半切……仕立は大口と同じく金欄などの模様あるもの。舟辨慶の後ジテなどに使ふ。

指貫……公卿の袴なり。蟬丸のツレなどに使ふ。

腰卷……女の腰より下に纏ふ表着なり。羽衣などに使ふ。

腰簀……腰に着くる簀なり。阿漕などに使ふ。

腰帶……腰に結びて前に垂らす上帯である。

以上袴の類。

猶二三稍詳しく説明しておく。

唐織……唐織と云ふのは、文字の如く支那で織つたものではなく、實は西陣織なのである。

以上は簡単な説明であるが、これを詳細に述べればこれだけで大分の書物を成すのである。



地は練らない生糸であつて、夫れに各種の色に染めた練糸と金糸とで色々の模様を浮き出したものである。能装束の中で最も美しく又最も高價なものなのである。男にも用ゐないことはないが、先づ女の着るものである。

熊野のシテ、紅葉狩の前、草紙洗、江口の後シテなどは特に段唐織と云つて美しいものである。三輪、芭蕉、當麻、三井寺、檜垣、姥捨などの前ジテは赤味のない色無し唐織をつかふことゝなつてゐる（之れは色なしと云ふ）。赤い色が入つてゐる方は、赤い色が入つてゐない所謂色無しと云はれるものとは大分位がちがふのである。

素袍……素袍の仕立は、直垂（武士の服装で上）と同一であるが、直垂は絹地を原則とし素袍は布地で仕立てる。夫れに素袍には上に五つの紋があり、袴の腰板にもある。そして素袍の袴は長袴である。色は多く黒かネズミである。

能樂では紋の型は花菱を多くつかつてゐる。位から云へば、素袍は直垂より低いのである。能樂では素袍上下の場合が多く、掛け素袍の場合の方が少ない。

長袴……官女の穿く緋の袴で、葵上、蟬丸、住吉詣、大江山などのカへに使ふ。男のはく長い袴は素袍か直垂の袴であつて、夫れも下ばかり穿くことはないのである。子方のはく袴は兒袴と云つて、云はゞ素袍の下ばかりなのである。百萬、三井寺、櫻川などの子方は、袖の長い箔をきて、この長袴を引きすつてゐる可憐な姿である。

### 九 囃子

#### 一 次第

役者の舞臺へ出る時にハヤス所の囃子に種類がある。其一が次第である。次第の拍子は大小鼓が主で笛があしらひである。次第の多くはワキの次第であるが、ワキヅレの次第、シテの次第、シテヅレの次第もある。各々位がちがふのである。

ワキの次第

「今日おもひ立つ旅衣」の前……………高砂



「ゆくへ定めぬ道なれば」の前……………鉢木はちのき

「春のみなどのゆくすへや」の前……………藤戸

「定めなき世の中々に」の前……………蟬丸

「月は昔の友ならば」の前……………江口

ワキヅレ次第——

「末も東の旅衣」の前……………角田川

シテの次第——

「作りし罪もきえぬべし」の前……………道成寺

「旅の衣はすゞかけの」の前……………安宅

シテヅレの次第——

「夢ゆめのまをしき春なれや」の前……………熊野

「浮き立つ雲のゆくへをや」の前……………土御

### 二一セイ

役者の舞臺に出る囃子の一種である。拍子は大小鼓で、笛のアシラヒがある。

シテの一セイ——

「高砂の松の春風ふきくれて」の前……………高砂

「汐くみ車わづかなる」の前……………松風

「後の世をまたで鬼界きかいが島守しまもりと」の前……………俊寛

ワキの一セイ——

「さても渡邊の綱は」の前……………羅生門

「思ひ立つ朝の雲の旅衣」の前……………咸陽宮

### 三出端

「役者やくしゃの舞臺ぶたいへ出る囃子はしの第三は出端でばである。一セイに似てゐるが太鼓たいこが入る點がちがつてゐる。太鼓の一セイとも云はれてゐる。謡うたいはシテ又はワキから謡ひ出すのと、地から謡ひ出すの



とがある。

- 「我れ見ても久しくなりぬ」の前……………高砂
- 「あらたつとの懺法やな」の前……………朝長
- 「いかに行者ありがたや」の前……………舟橋
- 「忘れて年をへしものを」の前……………融
- 「是は王昭君が幽靈なり」の前……………昭君
- 「一佛成道」の前……………鶴

#### 四 早 笛

役者の舞臺へ出る囃子の第四が早笛である。之れは位早くして走り出るものに使ふのである。笛を地にして大小鼓太鼓と三拍子の場合と、大小鼓と二拍子のもつとがある。

- 「そもく是は垣武天皇九代の皇胤」の前……………舟辨慶
- 「あふ鬼神に横道なしと云ふに」の前……………鐘馗

#### 五 大 ベ シ

役者の舞臺へ出る囃子の一種である。笛が地で三拍子がある。天狗などの出る時に用ひるのであつて早笛に似て位静かである。「静かなる早笛」とも云はれてゐる。この囃子は頗る莊重である。

- 「抑も是は鞍馬の奥僧正が谷に」の前……………鞍馬天狗
- 「抑も是は大唐の天狗の首領」の前……………善界
- 「夫れ山は小さき土くれを生ず」の前……………車僧

この囃子は「大べし」の面をつけて出るものに使ふがゆゑに、「大ベシ」と云ふ名がついたのである。



六 下端

役者の舞臺へ出る囃子の第六は下端である。舞ひ乍ら出るやうなものに使ふのであつて、笛が地で三ツ拍子がある。

「みよしのくく」の前……………嵐山

「乙女子がく」の前……………國栖

「老いせぬやく」の前……………狸々

七 來序

帝王、神體、大天狗などの如き重々しいものゝ進退しんたいに用ひるのである。三拍子が主で笛ふえがアキラふのである。役者が舞臺にすゝむ時と退く時に使ふ。舞臺を退く時に用ひる方が多いのである。

舞臺にすゝむ時——

「そもくこの咸陽宮と申すは」の前……………咸陽宮

十 舞

一 序の舞

すべて謠うたひの文句なき間、笛の曲で舞ふ所がある。これを總稱そうしやうして舞まひといふ、その第一じよが序の

「それ青陽の春になれば」の前……………鶴龜

「有難や三皇五帝の昔より」の前……………西王母

舞臺を退く時——

「かき消すやうに失せにけり」のあと……………絃上

「あがらせ給ふ有がたや」のあと……………大蛇

「花の下臥ぶしに待ち給へ」のあと……………難波

「嵐と共に失せにけり」のあと……………岩舟

「又波に入らせ給ひけり」のあと……………竹生島



舞である。舞のかゝりに「序」と云ふものがあり、太鼓のあるのとないのがある。序にもいろいろある。

平調返

遊女の序

段の序(短序とも)

律がゝり

亂の序

序の序

左に付序

右に付序

長き序

三足半序

序の数は五ツで、舞五段と云ふのが本格であるが、カへには序三ツ、又は打返しが入り、舞は略して三段にもする。觀世流では五段の舞は四段にとるのである。

序五

地水火風空

序四

春夏秋冬或は生老病死

序三

天地人

何れも意味があるのである。(牽強には相違ないが) 今ではやらないが、序の數には六つ、八つ、九つと云ふのがあり、これも、

序六

六道

序八

神道

序九

九品

と云つた工合にいろ／＼の意味が附會されてゐる。

江口、井筒、楊貴妃、采女の如く太鼓のないものと、誓願寺、羽衣、藤、六浦の如く太鼓のあるものとある。又班女、千手、紅葉狩の如く、序の舞、中の舞何れをも用ひてさし支へないものもある。老松、白樂天、放生川、雨月の四番は「眞ノ序」となへて重き習ひである。

大體から云ふて「序の舞」のある曲は、主として三番目ものであるが、これにも三通りの區別がある。

眞の三番目

東北

羽衣

梅

(觀世流のみにある) 等

行の三番目

江口

定家

野宮等

草の三番目

井筒

楊貴妃

采女等



古書に依ると――

檜垣の序は軽く

姥捨は重く

西行櫻は真で、強く花やかに

木賊は行で軽く、狂人の心があり

遊行柳は草で弱く、淋しく

と、心得が書いてある。味ふべきであらう。序の足は男物と女物とでちがふ。男物は左からつかい、女ものは右から出すのである。又序の舞の中にも、舞ふ意味の舞と舞はぬ意味の舞とがある。又囃子方にも夫々習ひがある。

さきに述べた一セイその他にも、いろくむづかしいことがあるのであるが簡略にし、この序舞に於いて一例として稍詳しく書いておいた。

二 中ノ舞

舞の第二を中ノ舞と云ふ。位しづかにすぎず、急なるにすぎず、中をえたがゆるゑの名であらう。太鼓のあるのとないのがある。

「深き情けを人や知る」のあと……熊野

「立ちわかれ」のあと……松風

「たゞたのめ」のあと……舟辨慶

「絶えず紅葉」のあと……紅葉狩

「繪にかける」のあと……班女

三 天女の舞

舞の第三は天女の舞である。中の舞と大體同一であるが、神能などで、天女のツレの舞ふ曲であるから、特にこの名があるのである。三段の舞とも云はれてゐる。

「千早振」のあと……嵐山

「鶴も千代をや重ぬらん」のあと……鶴龜



「かへすくも面白や」のあと……………竹生島  
「舞の袖こそゆるくなれ」のあと……………氷室

四 破の舞

舞の第四を破の舞と云ふ。中の舞よりも位も早く、且簡單のものである。太鼓のあるものとな  
ないものもある。

「なびくもかへすも舞の袖」のあと……………羽衣

「かへすくも面白や」のあと……………胡蝶

「かざしも花の糸ざくら」のあと……………右近

以上太鼓あり

「そなれ松のなつかしや」のあと……………松風

「野の宮の夜すがらなつかしや」のあと……………野宮

以上太鼓なし

五 早舞

舞の第五は早舞と云ひ、位の早いものである。何れも太鼓がある。

「あら有難の御経やな」のあと……………海士

「うけたりく遊舞の袖」のあと……………融

「おもしろかりける祕曲かな」のあと……………絃上

六 急の舞

舞の第六は急の舞と云ふ。位の極めて急なもので、目まぐるしい感じを興へる。

「入相の鐘に花ぞ散りける」のあと……………道成寺

(太鼓なし)

「神樂」のあと……………繪馬

(太鼓あり)

七 男舞



舞の第七は男舞をとこまひと云ふ。素袍直垂すほうひたゝれの男をとこの舞まふ曲であるからして、この名がある。稀まれれには法はう

被び篠懸すいかけ姿もあるが何れも太鼓はない。

「月夜よし」のあと……………小督

「立ち舞ふ袖のかざしかな」のあと……………蘆刈

「もろこしが原もこのところ」のあと……………盛久  
又男舞をとこと中ちゆうノ舞まの中間ちゆうかんに位ゐするやうな一種いっしゆの舞まがある。黄鐘わうしゆ早舞さうまとも云はれてゐる。

「雪をめぐらす舞の姿かな」のあと……………錦木にしきぎ

「盃の雪をめぐらす花の袖」のあと……………松虫

八 神 舞かみ まひ

舞の第八を神舞かみまひと云ふ。位くらゐ早くして太鼓が入る。壯嚴さうごんな舞である。

「二月じげつの雪衣ゆきぎにおつ」のあと……………高砂

「千代の聲こゑ々々うたふとかや」のあと……………弓八幡

「風は吹けども山は動ぜず」のあと……………淡路

九 神 樂かみ ら

舞の第九を神樂かみらと云ふ。神子かみこもしくは女體にようたい神靈かみたまのまふ舞まひで、上品じゆんぴんにして氣品きひんが高いのである。太鼓たいこがはいる。

「ちはやふる」のあと……………三輪

「謹上きんじやう再拜さいはい」のあと……………龍田

「ちはやふる」のあと……………繪馬

十 樂がく

舞の第十を樂がくと云ふ。伶人じやうにんの舞樂まがくに擬なしたるもので、太鼓たいこのあるものとなひものとある。太鼓たいこのあるものゝ方が多い。

「酒狂しゆくわうの舞とや人の見ん」のあと……………三笑

「げに此上こゝやあるべき」のあと……………邯鄲



「舞樂を奏し舞ひ給ふ」のあと……………鶴龜

右は大鼓あり

「手向けの舞樂は面白や」のあと……………天鼓

「花にやどる鶯」のあと……………梅枝

右は大鼓なし

### 十一 鞆鼓

舞の第十一を鞆鼓と云ふ。鞆鼓を前につけて舞ふ曲で、太鼓はない。

「元より鼓は波のおと」のあと……………自然居士

「おもひやるこそかなしけれ」のあと……………花月

「雨村雲やさわぐらん」のあと……………望月

### 十二 翁の舞

舞の第十一を翁舞と云ふ。これは「翁」に限らるゝものである。舞としては極めて簡單なもの

であるが、氣品を出すことがむづかしい。昔は太夫ならではの勤めがたき舞とせられてゐた。

「そや何くの翁とう／＼そよや」のあと……………翁

### 十三 千歳の舞

舞の第十三を千歳の舞と云ふ。翁の曲の中にあり、翁の舞と同じく太鼓は入らない。

「絶えずとうたり常にとうたり」のあと……………翁

### 十四 亂

舞の第十四を亂と云ふ。打ち興じて亂れ舞ふの意である。これは狸々と鶯との二曲にあるのみであつて他にはない。鶯は常に亂れであるが、狸々は普通の場合には中ノ舞であつて、時として亂れになることがある。よく番組に「亂」とのみ書いてある場合は狸々の亂れである。云ふ迄もなく亂れは、斯道において重き習ひごとであつて、容易に勤められるものではない。

「夜の調べやのこるらん」のあと……………狸々

「松もそなる／＼けしきかな」のあと……………鶯



十五 獅子

舞の第十五を獅子と云ひ、獅子のたはむれ狂ふさまに擬したるもので、斯道においては重き習ひごとである。太鼓が入る。舞ふシテも大へんだが、囃子方の苦勞も並み大抵ではない。

「あまりに祕曲の面白さに」の前……………望月

「獅子とらでんの舞樂のみぎん」の前……………石橋

シテの舞臺へ出る時の囃子を「亂序」と云ひ、重き習ひごとである。

十六 亂拍子

舞の第十六を亂拍子と云ふ。道成寺にある。これは、白拍子の舞ふたる曲に擬したものである。小鼓一調の曲で、笛は、たゞアシラヒに吹くのみである。小鼓方の苦勞は並み大抵でなく、壯年者でなければつとまらない。亂拍子は道成寺のみに限るのであるが、觀世流では草紙洗に用ひることもある。

「暮れそめて鐘やひゞくらん」のあと……………道成寺

十七 舞 働

これは舞と云ふことは出来ないが、廣義には其一種とみても宜しい。謠の文句の切れたる間に、所作舉動をあらはすもので、略してハタラキとも云ふ。

「七八大金剛童子」のあと……………野守

「勅も重しや此岩舟」のあと……………岩舟

「おもてをむくべきやうぞなき」のあと……………紅葉狩

「たふれ伏してぞ見えたりける」のあと……………土蜘蛛

「綱をにらんで立つたりける」のあと……………羅生門

十八 イロエ

謠の文句に餘情あらしむる爲めに用ひる一種の所作であつて、舞と云ふことは出きないが、ハタラキに似たものである。ハタラキよりは位が靜かである。

「木の下かけを宿とせば」のあと……………忠度



「袖うちふるも恥かしや」のあと……………舟辨慶

「なみだの雨か」のあと……………通小町

右は太鼓なし

「神がたりするこそ恐ろしけれ」のあと……………卷絹

「これを不動と名づけたり」のあと……………善界

十九 カケリ(翔)

イロエよりも所作活潑で、合戦のありさま或は狂亂のありさまなどを文外にあらはすものが、カケリである。

「萬木青山動搖せり」のあと……………田村

「矢さけびの聲震動せり」のあと……………八島

「あら名残をしの夜遊やな」のあと……………經政

「いろ／＼の」のあと……………雲雀山

「松に音する習ひあり」のあと……………角田川

右太鼓なし

「足引の山めぐり」のあと……………山姥

「なほ執心の網おかん」のあと……………阿漕

右太鼓あり

二十 祈

僧或は山伏が悪魔を降伏する時の所作であつて、太鼓が入る。之はワキの專賣である。

「あれ見よ蛇體はあらはれたり」のあと……………道成寺

「あたりを拂つて恐ろしや」のあと……………黒塚

「おもてを向くべきやうぞなき」のあと……………飛雲

「なまくさまんだばさらだ」のあと……………葵上



十一 替の形

替の形は小書とも云はれ、各流を通じて三百五十種からある。同じ太夫の同じ能を度々するも珍しからずと云つた意味から、少し趣向をかへたる所作を演んずることになつたのが小書である。小書には習ひものとなつてゐるものと、然らざるものがある。

或る流儀では小書となつてゐても、他の流儀では小書としないものもある。例へば卷絹の五段神樂は下ガ、リ(金春、金剛、喜多)では普通ではあるが、上ガ、リ(觀世、寶生)では習ひとなつてゐる。

小書は、番組の曲目の左りわきに小さく書き添へることゝなつてゐる。所作に就いて名づけたもの――

葵上梓の出

礎梓の出

熊野膝行

松風見留

野宮合掌留

羽衣霞隠

俊寛木葉の傳

角田川鉦の打方

夕顔山の端の出

夕顔法師の傳

芭蕉露の拍子

誓願寺來迎拍子

善界雲間の拍子

舟辨慶波間の拍子

舟辨慶前後

舟辨慶白波の傳

八島弓流

安宅瀧流

野守天地の聲

土蜘蛛千筋の傳

土蜘蛛人違の傳

橋辨慶扇の形

田村長胡床

兼平長胡床

實盛長胡床

熊野墨繼の傳

班女笹の傳

葵上空の祈

通小町雨夜の傳

舞に就きて名づけたるもの――

龍田移神樂

龍田五段神樂

三輪神遊

三輪岩戸の舞

三輪誓納

葛城大和舞

加茂素働

養老水波の傳

葛城知波夜の舞

加茂知波夜の舞

杜若の戀の舞

杜若澤邊の舞



- 姥捨弄月の舞
- 松風戯の舞
- 熊野村雨留
- 富士太鼓現の樂
- 天鼓弄鼓の樂
- 一角仙人醉中の舞
- 自然居士忍辱の舞
- 小督恐の舞
- 海人解脫の舞
- 融笏の舞
- 融遊曲の舞
- 融窠
- 羽衣和合の舞
- 草紙洗亂拍子
- 遊行柳青柳の舞
- 富士太鼓狂亂の樂
- 百萬法樂の舞
- 松虫勸盃の舞
- 敦盛二段の舞
- 仲光愁傷の舞
- 海人懷中の舞
- 融杓の舞
- 融舞返
- 絃上窠
- 羽衣彩色の傳
- 住吉詣移舞
- 弱法師盲目の舞
- 西行櫻杖の舞
- 山姥雪月花の舞
- 安宅延年の舞
- 七騎落恐の舞
- 菊慈童遊舞の曲
- 春日龍神龍女の舞
- 融曲水の舞
- 融十三段の舞
- 石橋師資十二段

石橋大獅子  
亂雙の舞

石橋連獅子

狸々亂

- 笛太鼓の曲に就きて名づけたるもの――
- 清經戀の音取
- 羽法師雙調の舞
- 天鼓盤陟の樂
- 裝束の變易に就きて名づけたるもの――
- 白式(田村、融など)
- 赤頭(海士、道成寺など)
- 作物の變易に就きて名づけたるもの――
- 楊貴妃玉簾
- 江口平調返
- 邯鄲盤陟の樂
- 朝長懺法
- 黒頭(黒塚、小鍛冶など)
- 替裝束(卷絹、雷電など)
- 半部立花供養
- 楊貴妃千の掛
- 唐船盤陟の樂
- 白頭(殺生石、望月など)
- 亂置壺



老松紅梅殿

繪馬女體

春日龍神龍神揃

吉野天人天人揃

鞍馬天狗天狗揃

紅葉狩鬼揃

文句の變易に就きて名づけたるもの――

善知鳥外の濱風

花筐安閑留

橋辨慶笛の卷

以上は極めて大綱を示したにすぎないが、二三稍突き込んだ話しをしておきたい。

一 高砂

流し八頭 (觀世、金春、寶生にある)

眞の型 (金春、金剛にあり)

松の立木を出す。シテはサラへをもち下歌で松をかく型がある。後は面三日月、急の舞。

眞のカ、リ留 (喜多)

作り物出し (寶生)

松の立木を出す。

八段の舞

松の立木を出す。前の型にも大分ちがつた所がある。後は面三ヶ月、舞は緩急はげしく八段ある。ゆゑに八段の舞と云ふ名がある。

序破急の傳 (金春)

大極の傳 (觀世)

祝言の式 (各流)

二 道成寺

赤頭 (觀世、金剛)

後ジテはカツラにあらずして赤頭を用ひる。この時緋の長袴をはくことがある。他流では赤頭を小書とせず用ひることもある。

古式 (金剛)

鐘入りも常とは替はり、後は赤頭、眞蛇を使ふ。



眞の亂拍子 (喜多)

前は増の面、亂拍子の段數も少なく、後は赤頭である。  
無間之崩 (觀世)

亂拍子の終りに祕事があるのである。

三 羽衣

盤陟 (金春、金剛、寶生)

序の舞の調子が盤陟調となるのであつて、この小書の時には和歌も破の舞もぬく。

和合 (觀世)

序の舞の終りの段から位をすゝめて破の舞となる。文句もぬけて「東遊」となるのである。

彩色 (觀世)

クリとサシをぬき、地次第からスグ「南無歸命」となり、破の舞の所へイロへを入れるのである。装束も變つてゐる。

舞込 (喜多)

キリは橋ガ、リを小廻りしながら、幕へゆき、あとすさりに幕へ入る。謠にも緩急がある。舞は三段である。

霞留 (喜多)

又カスミドメとも云はれる。シテは「霞にまぎれて」で幕へ入り、ワキは頭に合せて留拍子を踏むのである。

雲井の舞 (喜多)

大正天皇御即位後の宮中御能に演じたるより始まるのである。極めて簡略なものである。

四 石橋

連獅子 (寶生、喜多)

和合 (金剛)



師資の式 (觀世)

以上何れも異なること勿論だが、何れも二つの獅子が出る。親獅子は白頭である。猶觀世には獅子十二段と云ふのがある。

大獅子

前シテから牡丹を出す。後は四人で獅子を舞ふのである。

眞の型 (金剛)

シテは一人であるが、型が變つてゐる。之れは壯年者でなければ到底つとまらない。

三ツ臺 (喜多)

正先きに二つおいたる臺の上に、尙恰かも橋をかくるやうに一つおくのである。

五 土蜘蛛

黒頭 (觀世)

後ジテ黒頭となる。型も常とは大分ちがつてゐる。

入達之傳 (觀世)

中入となるや、シテは後見座にクツロギ早鼓になつてワキが出るのを合圖に立ち、橋ガカリ中程でゆきちがひざまに、ワキへ巢をかけるのである。これは比較的新らしい小書である。

千筋之傳 (金剛)

金剛唯一が苦心研究して、巢を細かく切り數多くかくるやうにした。これ以來各流とも、これに倣ふことゝなつた。

十二 舞囃子

囃子とは、四拍子をもつて、謡もしくは能をはやし立てることである。云ふ迄もなく四拍子とは、笛、大小鼓、太鼓である。一番の謡に、舞人なくして四拍子のみを用ひるを番囃子と云ふのである。舞ふべき或る部分のみ右の如くするを居囃子、又或る部分に所作及び舞を用ひる



を、舞囃子もしくは單に略して囃子と云ふのである。

舞囃子と能とちがふ點は、

(一) シテが装束をつけない。舞袴をはく。

(二) 作物、小道具を用ひない。但し杖、長刀のみは小道具をつかふ。太刀、羽團扇の如

きは扇をつかふ。

(三) ワキ以下すべてシテ以下の役者を用ひぬが原則である。

舞囃子にすべき章句は、

「サシより謡ひ出してキリまで舞ふ」

と云ふのが正式である。勿論例外はある。或る意味に於いて能よりも囃子の方がむづかしいのである。装束能よりも袴能の方がむづかしいと云ふのと同じである。

### ○高砂

サシ「然れども此松は。其景色とこしなへに花葉時を分かず。

同「四つの時いたりても。一千年の色雪の内に深く。又は松花の色十返りともいへり。シテ「かゝるたよ  
りを松が枝の。同「言の葉草の露の玉。心を研く種となりて。シテ「生きとし生ける物毎に。同「敷島の  
かげによるとかや。

タセ「然るに長能も言葉にも。有情非情の其聲。みな歌に漏るゝ事なし。草木土沙風聲水音まで。萬物こ  
もる心あり。春の林の東風に動き。秋の色に北露に鳴くも。皆和歌の姿ならずや。中にも此松は。萬木  
にすぐれて。十八公のよそほひ。千秋の縁をなして。古今の色を見ず。始皇の御爵に。あづかる程の木  
なりとて。異國にも本朝にも。萬民これを賞翫す。シテ「高砂の。尾上の鐘の音すなり。同「曉かけて  
霜はおけども松が枝の。葉色は同じ深みどり。立ちよる陰の朝夕に。かけども落葉の盡せぬは。誠なり  
松の葉の。散り失せずして色はなほ。正木のかづら永き世の。たとへなりける常磐木の。中にも名は高  
砂の。末代のためしにも。相生の松ぞめでたき。

ロンギ地「げに名を得たる松が枝の。〱。老木のむかしあらはして。その名を名のり給へや。二人「今は  
何をか包むべき。是は高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ來りたり。地「不思議やさては名所の。  
松の奇特をあらはして。二人「草木こゝろなけれども。地「かしこき代とて。二人「土も木も。同「我大君